DEAD・END・RUNNING（休載中）

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＤＥＡＤ・ＥＮＤ・ＲＵＮＮＩＮＧ（休載中）

【Ｎコード】

Ｎ６９５８Ｅ

【作者名】

髭伯爵

【あらすじ】

ある日、とある高校に突っ込んできた１台の装甲車。そこから始まる、死者と生者が奏でる凄惨な宴。高校生の崎沼敬（さきぬまけい）は、仲間とともにゾンビと戦いながらこの地獄からの脱出を試みる。――――――しばらく休載します。ごめんなさい。

第1話：崩壊の序曲（前書き）

前から書きたいと思っていたゾンビ物を書いてみようと思います。
基本的に銃を押していく傾向になると思いますが、まあ楽しんでもらえれば嬉しいです。

第1話：崩壊の序曲

ＰＭ１５：１０。

ここはとある県立の高校。今は帰りのＨＲ(ホームルーム)も終わり、教室では掃除が行われていた。

その中、２－２の教室で掃除をしている１人の少年がいた。

「ふああ・・・。眠い・・・・・。」

少年は箒でゴミを集めながらあくびをしていた。余程眠いのか、人目を気にせず口を大きく開けており、先程から何度もあくびをしていたのか目には涙が溜まっていた。

身長は１７５ｃｍほど。中肉中背の体つきをしており、目は面倒くさそうに細められていた。髪は僅かに茶色に染められていたが、そのやる気の感じられない態度のお陰か、不良に思われることは無かった。

着ている学ランの一番上のボタンを外しており、そこから僅かに鎖が見え、彼がネックレスをつけていることが窺えた。

彼の名は崎沼敬(さきぬまけい)。高校２年だ。

再度あくびをしながら掃除を続けていると、同じく掃除をしていた男子生徒が彼に親しげに話しかけてきた。

「今日は随分と眠そうだな敬？」

「ああ。お前にこの眠気を分けてやりてえぐらいだ・・・。」

敬斗は声をかけてきた男子生徒・・・敬の親友にして学校一の素行不良生徒でもある一文字錬太郎(いちもんじれんたろう)に返事をする。

身長は１８０ｃｍ。喧嘩で鍛えられた体はがっしりとしている。ワ

ックスか何かでハリネズミのようになっている黒髪に、こめかみには刃物で付けられたと思われる傷跡。どこか肉食獣を彷彿させるような笑みに、両耳に付けられたピアス。学ランのボタンは全て開けられており、手には指抜き加工がされた手袋をはめていた。
明らかに危険な感じのする一文字が話しかけてきても、敬は全く態度を変えなかった。

「今日はとっとと帰って寝るわ・・・。」
「・・・普通はどっかに遊びに行くもんだろ・・・。」
「うるせえ！　俺は眠いんだー！！」
「逆切れかよ！？」

一文字が呆れると、敬は一文字が学校一の不良であることにも構わず逆ギレをする。一文字も怒ることは無く、むしろ楽しそうに騒ぎ始めた。
2人が親しくなった理由は、敬が不良である一文字に平然と教科書を借りてきたことから始まった。
それ以来2人は妙に気が合うため、校内外問わずつるんでいる。しかもかなり喧嘩っ早い性格だった一文字が、敬斗とつるみ始めてからおとなしくなったため、敬は校内で「猛獣使い」のあだ名を付けられている。
2人が遊んでいる内に掃除は終わり、箒を片付けると2人は自分の鞄を背負って帰ろうとした。
その時、教室の入り口から敬に声が掛けられた。

「敬。帰るわよ。」

敬斗を呼んだのは、綺麗な黒髪をショートカットにしている女子生徒だった。
身長は１６５ｃｍほど。鋭い目つきに整った顔。制服の上からでも

分かる程の抜群のプロポーションに、すらりと伸びた足。１０人中１０人が美人だと答えるだろう。
彼女・・・野辺深雪（のべみゆき）は教室に入ると敬斗の手を掴み、強引に引っ張っていく。
敬は引っ張られながらも何とか反論する。

「い、いきなり何だよ野辺。」
「何よ。私と帰るのは嫌なわけ？」
「そんなことは無いけど・・・。」
「じゃ、早く行くわよ。」

そのまま教室を出ようとするが、入り口で一文字が仁王立ちをして野辺の進行を妨げた。

「ちょっと、どきなさいよ。」
「じゃ、敬を置いてってくれ。俺はそいつと帰るんでな。」
「嫌よ。アンタみたいなホモと一緒に帰らせたらどうなるか分かったもんじゃないわ。」
「んだと？　誰がホモだってぇ？」

いきなりホモ呼ばわりされ、かなり機嫌を損ねた一文字。喧嘩腰になって野辺を脅すが、野辺はどこ吹く風といった様子で平然としていた。

「アンタよアンタ。敬を連れてってナニするつもりだったんでしょ？」
「このクソ売女・・・。」

もはや一触即発の状態の２人。一文字にいたっては殺気が滲み出ているほどだった。

敬はとりあえず止めに入るが・・・・。

「な、なあ2人とも。いっそのこと3人で帰ろ『黙ってて』・・・・ハイ。」

2人に睨まれ、あっさりと降伏した。周りのクラスメイトは「またかよ・・・。」といった感じで3人を見ていた。
実は、一文字と野辺が敬を巡って言い争うのは日常茶飯事で、一部ではその日にどちらが敬を連れて行けるかで賭けが行われているほどだった。
因みに戦績は、野辺の方が１０戦中６戦勝利している。
今も教室の外から「野辺に１００円！」「一文字に２００円！」といった声が聞こえてくる。

「うるせえぞ！！」「うるさいわよ！！」

2人が廊下で騒いでいる奴ら（正確には賭けを行っていた面子）へ怒鳴り、廊下にいた奴らは素早く去っていった。
・・・居なくなっただけで、賭け自体は滞りなく行われているのだが。

「いい加減にしろ！　俺はホモじゃねえって何度言ったらわかんだ！！　手前の脳みそはポンコツなのか？」
「あら、じゃあ何でしつこく敬を連れてこうとするの？」
「こいつと遊ぶのが一番楽しいんだよ！！」
「それってもうホモの気があるってことなんじゃないの？」
「んだとコラ・・・！？」

いつまでも続く言い争いに、敬はため息をついた。

（このまま帰りたいけど、そうすっと絶対鬼のような形相で追っかけられるんだよなあ・・・。）

しかし、この状況を楽しいと感じている自分もいることを、敬は自覚していた。
大切な友人と過ごす日々が、彼にとっての娯楽なのだ。・・・たとえどれだけ疲れることになっても。
しかし、このときは誰も気づいてはいなかった。いや、気づく筈も無かった。
この平和な日常が、もうすぐ壊れてしまうことを・・・。

そろそろ敬が2人を止めて、3人でどこかに行こうと思ったとき、突如として凄まじい轟音と振動が轟いた。

「!?」
「きゃ!」
「!! 何だ!?」

3人は突然のことに驚き、野辺にいたっては体勢を崩して倒れそうになった。

「おっと!」

そこへ、敬が野辺の手を掴んで引っ張り彼女の体を抱きこむ。

「ふい〜〜。危ねえ危ねえ。」
「そ、そうね・・・。」

敬に抱きかかえられ、僅かに顔を紅潮させている野辺。その間に一文字は教室の窓へと向かい、轟音の原因を調べていた。すると、向

かいにある職員棟の、下駄箱がある場所の下、昇降口を見て、驚愕の表情を浮かべると、敬を呼んだ。

「おい、敬来てくれ！！」

呼ばれた敬は、すぐに窓へと近づいた。すると、とんでもないモノが目に飛び込んできた。

「嘘だろ・・・。」

「ちょ、何よこれ・・・。」

一緒に窓に近づいた野辺も呆然としている。

昇降口には、明らかに軍用と思われる装甲車が激突していた。

このときより、祭りは始まった。

血と肉と脳漿が飛び散る、死の祭りが・・・。

第2話：最初の交戦

突然学校に突っ込んで来た装甲車。普段はテレビでしか見れないごついフォルムの車に、次第に人が近づいてきた。
無論敬・一文字・野辺の3人も近くに来て装甲車を見ていた。

「一体何で装甲車が・・・。」
「そんなこと、分かるわけないでしょ。」
「そうだな。びびって倒れそうになった奴が知ってるわけ無いか・・・。」
「・・・それ今関係あるかしら？」
「止めろ、喧嘩してる場合じゃねえぞ。」

流石にこの状況では敬が止めに入る。2人も渋々黙り込んだ。
2人が黙ったのを確認すると、敬は装甲車を調べる。
少し離れた場所から見ても、車体には明らかに不自然なものが大量に付着していた。
恐らくは血であると思われる赤い液体が付いていたのだ。
そのことに気づいた大半の者は顔色を悪くしているが、数名だけ表情を険しくしている者がいた。
敬もその内の1人だ。

（どうやら街で何か起きてるみたいだな・・・。ここは街外れにあるから異変に気づけなかったが、この様子じゃ相当危険なことになってる・・・。しかもこれだけ車体に血が付いてるってことは、それだけなりふり構わず飛ばしてきたってことだし、これはやばいかもな～。）

敬が考え込んでいると、横から野辺が声をかけてきた。

「ねえ、誰か車に近づいてくわよ。」
「何！？」
驚きながら野辺の指差した方を見ると、体育教師の護摩(ごまだ)騅が装甲車の横のドアに近づいていた。
「おいおい正気かよ？　あんなのに普通近づくかあ？」
「おい、近づくな！！」
一文字は呆れ、敬は相手が先生ということも忘れて怒鳴るが、護摩騅は生徒の１人が喚いている程度にしか捕らえず、そのまま装甲車に近づいてドアを開けた。

ドアを開けると、迷彩服を着た男が倒れてきた。
「うおお！？」
護摩騅は驚きながらもそれを避けた。どうやら男は死んでいるらしく、頭部から大量の血が流れていた。壁に激突したときに強打したらしく、壁には血痕が付いていた。
護摩騅は死体を避けながら車内に顔を突っ込み呼びかける。
「おい！　誰か居ないのか！？」

大声で怒鳴ったからか、すぐに車内の隅の方で誰かが動いた。護摩騅はそれが生きている人間だと思い、手を伸ばす。

「大丈夫か・・・・・！？」

だが、そいつの顔を見て固まる。
先ほどの死体と同じ迷彩服を着ている外人らしき人物は、人間の腕を食っていたのだ。
さらに、顔には血の気が無く頬肉の一部が無くなっており、口の中が見えていた。
そいつはゆっくりと立ち上がると、よたよたと安定しない足取りで護摩騅に近づいていく。

「や、止めろ・・・。来るな・・・。」

護摩騅は恐怖で思考が停止寸前になっており、ただ相手が近づく分だけ後ろに下がることしかできない。
やがてドアの辺りまで来て、足を踏み外して車内から落ちてしまう。
ドアのすぐ傍に倒れた護摩騅は、体をしたたかに打ってしまい身動きが上手く取れなかった。

「うう・・・。」

いきなり落ちたため、状況の把握ができないでいる護摩騅だが、相手は待ってくれなかった。
護摩騅がドアの方を見ると、車内から男が倒れ込むように出てくるところだった。

「ひ、ひいいいいいいい！！？」

護摩騨は恥も外聞もなしに悲鳴を上げたが、腰が抜けており、逃げることが出来なかった。
男が倒れ込むと同時に、護摩騨の喉笛に今まで感じたこともないほどの激痛が走った。

「ギャアアアアアア！！！！」

護摩騨が車内から飛び出してきた謎の男に食われていくのを、その場に居た全員が呆然と見ていた。
そして護摩騨の悲鳴が無くなり、男が護摩騨の頭を噛み砕いて脳を食ったとき、ついに耐えられなくなった女子生徒が悲鳴を上げた。

「イ、イヤアアアアアアア！！？？」

その声を皮切りに、その場に居た者は我先にと逃げ出していく。

「うわあああああ！！？」
「し、死にたくねえよお！？」
「ど、どけえ！！！」
「嫌ああああ！！」

悲鳴と怒号が交差し、ほとんどの人が逃げていく中、この場に残った者もいた。
敬・一文字・野辺の3人と、もう1人。

「貴様・・・やってくれたな！！」

肩まで伸びているポニーテールに、強い意志が感じられる瞳。ロングスカートに手に持った木刀が、彼女の性格を表していた。
彼女は護摩騨に食らい付いている男に近づくと、木刀を横っ腹へと叩き込んだ。

「ふん！」

骨が折れる音とともに男が護摩騨から引き離され、アスファルトに転がった。

「これで大人しく・・・。」

しかし、男は平然と立ち上がった。
折れた肋骨が肉を貫いて体から出ているにも関わらず、全く痛みを感じていない様子で近づいてくる男に、彼女は我知らず後ろに下がっていた。

『オラア！！』

そのとき、敬と一文字が彼女の元に駆けつけ、男の腹部へ2人同時に蹴りを叩き込む。
木刀で殴られたときよりも吹き飛ばされるが、すぐに起き上がってくる。

「やっぱ効かねえか・・・。」
「おいおい、今の結構本気でやったんだぜ？」
「まるでゾンビだな・・・。」

平然と話しをしている2人を見て、彼女の顔が驚愕を浮かべる。
「き、君は一文字錬太郎！？」
「お、誰かと思えば生徒会長どのか。ごくろうさん。」
「君に助けられるとは・・・。」
この学校で生徒会長をしている3年生の瑞田黄泉（みずたよみ）は、一文字が自分を助けたことに驚いていた。
一文字は心外だとでも言うように瑞田に告げる。
「俺は別にアンタを助けようとは思わなかったぜ。ただ、相方がどうしてもっつうから助けただけだ。礼ならコイツにするんだな。」
そう言うと一文字は瑞田を庇うように立つ敬を指差した。敬は2人と顔を合わせようとはせず、男の方を真っ直ぐ見ていた。
「・・・俺は、目の前で危険な目に遭ってる奴を放っとけるほど、人間できてねえんだよ。」
「・・・ありがとう。」
真っ直ぐに自分に向けられた瑞田からの感謝の念に、敬は「構わねえよ。」とぶっきらぼうに返した。それを見てニヤニヤと笑う一文字。
「・・・んだよ。」
「いやあ。相変わらずもてますなあ。いよ！このスケコマシごふ！？」
「・・・くだらねえこと言った罰だ。」
一文字の腹に拳を叩き込んで黙らせると、敬は男へと向き直った。

相変わらず安定しない足取りでゆっくりと近づいてくるが、どれだけダメージを与えても起き上がってくる男への対処法が思いつかない敬。

「くそ、どうするか・・・。」
「あら、簡単よ。」

すると、野辺が突然男の前に飛び出した。男は野辺を捕まえようと手を伸ばすが、野辺は体を思い切り屈め、それを避ける。
さらに、体を屈めたまま横に移動し、そのまま男に足払いをかける。男は仰向けに倒されると、野辺に腕を掴まれ上に持ち上げられる。野辺は持ち上げながら男の顎を上から下へ蹴り付ける。
上に持ち上げられている途中で蹴り付けられ、その衝撃は全て頚椎へと向かい、男の頚椎を簡単に破壊した。
鈍い音とともに、男は今度こそ動かなくなった。

「ふん。他愛ないわね。」

野辺は男の死体を放ると、敬の傍へと向かう。
敬と一文字は呆れた様子でそれを見ていて、瑞田にいたってはあまりの手際の良さに唖然としていた。

「全く、容赦ねえな・・・。」
「つうかゴミみてえに捨てたよな今・・・。」
「悪いけど、人を食う人間相手に慈悲なんて持たないわよ。」
「・・・。」

平然と言う野辺に敬は呆れながらも、男の死体へと近づき、死体を調べていく。

「な、何をしているのだ？」
「コイツが何者なのかを調べてんだが・・・まずいな。」
「？　どうした？」
「こいつの顔を見てみろ。」

敬のボディブローから回復した一文字が男の顔を見る。先ほどの戦闘によりさらに損傷が進んでいたが、その顔つきはどうみても日本人では無かった。

「おい、コイツ・・・。」
「アメリカ人？」
「おそらくそうだ。しかも迷彩服を着込んで、こんなものまで持ってるってことは・・・。」

敬は男の腰にかけられていたホルスターから、M92FSと抜き取り、皆に見せる。

「米軍の兵士か・・・。」

瑞田が答えを告げる。それを聞いた一文字と野辺は信じられない様子だった。

「んなバカな！　何でアメ公がゾンビみてーになってんだよ！！」
「それに、わざわざ装甲車で突っ込むなんて・・・。」
「さあな。俺にもわかんねえよ。けど・・・。」

敬はそこで一旦言葉を区切ると、市街地の方を見る。
先ほどまで気づかなかったが、街のほうでは既にいくつもの煙が立ち上っていた。

「とてつもないことが起こってるのは間違いないな・・・。」

惨劇の幕はまだ始まったばかり。

はたして彼等は真実を知り、この街から脱出できるのだろうか・・・。

第3話：包囲

「で？　これからどうするの？」
「まずは装甲車を調べよう。」
敬の提案に、一文字が露骨に嫌そうな顔をした。
「え～？　あんなとこはいんの俺はごめんだぜ？」
「そうよね。臆病者にはちょっとキツイかしら？」
「てめえ・・・。」
「喧嘩なんかしてる場合ではないだろう！　早く調べるぞ！！」
『イ、イエッサー！』

一文字と野辺がまた口論をしようとすると、瑞田が怒鳴って止めさせた。
とりあえず、Ｍ９２Ｆを手に入れた敬を先頭に、中へと入っていく。
中は所々に血が付いており、隅にはちぎれた腕が落ちていた。
「ひっ・・・。」
瑞田は小さく悲鳴を上げると近くに居た敬の服を掴む。敬はそれに気づくと、瑞田の方を向いて彼女を労わる。
「瑞田先輩。大丈夫ですから。」
彼女に優しげな微笑を浮かべると、瑞田も段々と落ち着きを取り戻していく。
瑞田は顔を赤く染めながらも服を掴む手を離そうとはしなかった。

「す、すまない。」
「いいっスよ別に。こんな状況じゃ無理もありませんから。」
瑞田はさらに礼を言うと、敬から離れた。
一部始終を見ていた野辺は、不機嫌そうにしていた。それを一文字が茶化す。
「あの2人、随分といい雰囲気だな？」
「・・・うるさいわよ。」
「だってよ、あんだけ優しくされたら会長ぐれえ落とせるんじゃドブ！？」
余計なことを言ってくる一文字の股間に膝蹴りを叩き込んで黙らせると、改めて敬の方を見る。
敬も丁度こちらを向くところだった。
「お～い、手分けしてこんなか調べんぞ・・・・・どうしたんだ？」
「さあ？　私は運転席を調べるから。瑞田先輩、手伝ってください。」
「分かった。」
「んじゃ俺は後ろを調べるわ。」
股間を押さえてうずくまっている一文字は見事にスルーされ、敬達は車内を調べ始めた。
運転席を調べている間も、野辺の機嫌は悪いままだった。
（アイツは、敬はアタシのモノなのに・・・。）
ハンドルの周辺を調べながら、ちらりと瑞田を見る。

凛々しさを感じさせる横顔を見て、心の中で対抗心を燃やす。

（敬は、絶対に渡さない・・・！！）

そんな野辺の内心を知らない敬は、突然寒気に襲われていた。

（何だろ？　すげえやな予感がする・・・。）

不安を消し去るかのように調査に集中する敬。荷台となっている部分で、３丁の銃と予備の弾を見つけることが出来た。
しばらく車内を調べてみた敬達だが、銃以外の発見は無く、とりあえず一旦外に出て銃を調べることにした。ちなみに一文字は性別が変わる危険を味わったが、何とか男の状態で復活した。

「え～と、Ｍ９２ＦＳが俺のも合わせて３丁。Ｍ４Ａ１カービンが１丁か・・・。」
「詳しいのだな。」
「こいつはガンマニアだからな。家に何丁もエアガン持ってるし。」
「あと的当て系のことはかなり得意だしね。」
「じゃあこの大きい銃は君が使うべきだな。」
「分かった。じゃあ他のハンドガンはお前ら３人が持ってろ。」

そう言うと敬はＭ４のマガジンを外し、中に弾が入っているのを確かめると銃に差しこみ、チャンバーに初弾を装填した。
他の面子はズボンやスカートのベルトにホルスターを付けてＭ９２Ｆを持ち運びしやすくしている。
すると、野辺が敬に銃の使い方を聞いてきた。

「アタシも詳しくは知らないのよ。」
「ちょっと貸してくれ。」

敬は野辺からＭ９を受け取ると、安全装置を外してマガジンを抜き、スライドを後退させたままにする。

「弾が切れたらこういう状態になる。こうなったらマガジンを交換して、それからここのレバーを下ろしてスライドを戻す。これで撃てるぞ。」

Ｍ９にマガジンを差しこみ、スライドストップを下ろしてスライドを元に戻す。その一連の動作は流れるように行われた。

「・・・慣れてるわね・・・。」

「まあ、伊達にガンマニアじゃねえさ。実銃使う機会がくるとは思ってなかったけどな。」

野辺に銃を返すと、敬は他の面子にも使い方を教えに行く。しばらくして全員の準備が終わると、その場で今後についての会議が開かれた。

「それで、これからどうすんだ？」

一文字が先程の野辺と同じことを告げると、一番に口を開いたのは瑞田だった。

「まずは警察署に駆け込むべきではないか？」

「いや、市街地は多分危険だと思うぜ。」

瑞田の提案を、敬は即座に却下した。

「・・・何故だ？」

「市街地から来た装甲車があれだけ血で汚れてるんだぞ？　多分市街地じゃあもっと悲惨なことになってる。」
「な・・・！？」
瑞田があまりのことに凍りつく。敬はさらに自分の考えを告げていく。
「どれだけ被害が拡大してるかは分からねえが、軍隊まで出てるってことはかなりの大規模になってるってことだ。恐らくこの街はもう死人の街に変わってるんだろう。」
「わ～お、素敵なことになってんなあ・・・。」
「となると、このまま街から離れた方がよさそうね・・・・。」
「・・・確かに。下手に市街に行ってはどうなるか分からないからな・・・。」
街からの脱出で行動方針が決まりかけたところで、敬がふとあることについて尋ねる。
「そういや先輩の家族ってどこに住んでるんですか？」
「え・・・あ！」
彼女もようやく思い出した。このような状況で街にいた場合、確実に無事では済まされない。しかし、瑞田は余裕を浮かべていた。
「心配ない。今家族は実家に行っていて後１０日ほど経たないと帰ってこないのだ。」
「なら大丈夫か・・・。」
「君達はどうなのだ？」
「アタシは家出してるから平気。」
「俺は勘当されてここに来たから無問題（モウマンタイ）！」

「俺も家族は別の県にいるから大丈夫だな。それと一文字。つまんねえぞ。」
「オーマイガ！！」
「それもくだらないわ。ていうかアンタの存在全てがくだらない。」
「俺全否定！？」

3人のコントまがいの応対に、思わず笑みを浮かべてしまう瑞田。すると、3人はしてやったりという感じの笑みを浮かべ、それぞれハイタッチをしていた。

「ふふふ・・・。すまないな、こんなことをさせてしまって。」
「別にいいわよ。ぶっちゃけ一文字のボケはアドリブだし。ホントに面白くないし。」
「このクソアマ！　そんなに俺が嫌いか！？」
「ええ。」
「何いけしゃあしゃあと言ってやがんだ！！」
「落ち着けって。」

野辺に殴りかかろうとする一文字を、敬が羽交い絞めにして止める。それを涼しい顔をして眺めている野辺。
ほんの少し前に人が死んでいるにも関わらず、これだけ明るくいられる人を、瑞田は知らなかった。ましてやそれが学校一の不良と、その相方なのだから。

（彼等となら、頑張れそうだ。それに・・・。）

瑞田は一文字にドラゴンスープレックスをかましている敬を見つめた。思い出すのは、自分の前で、まるで守護するかのように男と自分の間に立ちふさがった時のこと。そして、装甲車内で自分を労わってくれたときのことだ。

（彼が居てくれるなら・・・・私は・・・・。）

胸の中に現れ始めた小さなキモチを自覚しつつ、それを胸の中に仕舞う。

敬はコンクリートに頭を強く打ってようやく正気に戻った一文字に謝っていた。

「すまん・・・・。まさか間違えてドラゴンスープレックスをやっちまうなんて・・・・。」

「おお・・・・。何かくらくらするけど、まあ大丈夫だろ。」

「頭から血が流れてるわよ・・・・。」

そんなこんなで一文字の頭には自分で持っていたバンダナが巻かれることになった。

「それじゃあそろそろ移動するか。」

「そうだな。確か街から出るには東に向かえばよかったはずだ。」

「んじゃ、とっとと行こうぜ。」

「ちょっと待って。」

ようやく出発しようとしたとき、野辺が突然止める。

「どうした？」

「気づかないの？　今、何にも音がしないことに。」

その言葉に、野辺以外の3人も急いで耳を澄ます。

本来ならば悲鳴ぐらいでも聞こえるはずなのに、聞こえるのは風の音ぐらいなのだ。

全員が異常に気づき、急いで臨戦態勢に入る。

「おい、これって・・・。」
「皆、急いでここを離れるべきだ。」
「ちょっと遅かったみたいだぜ・・・？」
「それって・・・。」

車が突っ込んできた西門を見ていたはずの敬の呟きに、全員が敬の目線を追う。
そこには、ゆっくりとした足取りで向かってくる、大量のゾンビが居た。

「う、嘘・・・。」
「いつの間に・・・。」
「さあな。考えたく無い。」
「後ろからも来たぜ！！」

一文字は正門から来たゾンビの大群を見て叫ぶ。こちらも西門と同じぐらいの数だったが、学生服を着た者が混じっていた。
それを確認した敬は顔をしかめる。

「どうやら先に逃げた奴らは全滅したみたいだな・・・。」
「そんな・・・くそう！！」

瑞田はあまりの憤りに血でも吐きそうな様子で叫ぶ。もうどうにもならないと分かっていても、納得がいかなかった。

「先輩。今キレたってどうしようもない。落ち着いてくれ。」

敬は努めて冷静に瑞田を宥める。しかし、そう言っている敬もＭ４を構えている手にかなりの力が込められており、内心がどんなもの

かを教えていた。
それを見て、瑞田も次第に落ち着きを取り戻していく。
「・・・すまない敬。君には助けられてばかりだ。」
「んじゃ、俺がピンチのときは頼む。」
「了承した。必ず助けよう。」
2人は笑みを交わすと、すぐに表情を真剣なものに変える。4人は上から見て丁度十字になるようにして背中合わせになり、どこから来ても対処できるようにしていた。
ゾンビ達はまだ離れているが、このままでは逃げ場が無く、いずれ囲まれてしまうだろう。
「さて、どうすんだ？」
一文字が相棒である敬に尋ねる。敬は校舎を見ると、あることを提案した。
「校舎の中にしばらく立て篭もろう。時間が経てば状況が変わってるかもしれない。」
敬は瑞田の方を見る。
「瑞田先輩「黄泉だ。」え？」
黄泉は微笑を浮かべていた。
「君ばかり名前で呼んではフェアでは無いからな。」
「・・・じゃあ黄泉。校内で立て篭もれそうなところは？」
「生徒会室だ。扉は頑丈だし、たまに泊り込みで書類を整理したり

するから飲食物をいくらかあるぞ。」
「よし、そこに決定！」
敬の言葉に、野辺と一文字が獰猛な笑みを浮かべた
「それじゃあ・・・・。」
「とっとと・・・・。」
「にっげろー！！」
敬の合図とともに、４人は一斉に生徒会室のある職員棟に駆け込んでいく。

彼らは決して折れない。信頼する友が、頼りになる仲間が傍にいる限り・・・・。

第４話：生存者と感染経路（前書き）

何か、話の進行が早いような・・・・。

第４話：生存者と感染経路

ＰＭ１５：４５。

２階へと駆け上がりながら、敬はＭ４の引き金を２回引く。
銃声が２度響き、同時に視界に入っていた２体のゾンビが頭部に５．５６ｍｍ弾を食らって崩れ落ちる。
そのまま２階へと駆け上がるが、右側の下駄箱から喉を食いちぎられているゾンビが飛び出してきた。そのとき、敬の後ろから黄泉が飛び出し、ゾンビの額に木刀を叩き込む。
ゾンビは頭蓋骨を割られ、下駄箱へ強制的に戻された。

「サンキュ！黄泉！」
「どういたしまして。」

走りは緩めないまま敬と黄泉は笑みを交し合う。
そのまま２階の廊下を通ろうとするが、職員室から教師と思われるゾンビが２体出てきた。

「もう！　しつこいわね！」

先頭になっていた野辺はＭ９２ＦＳを連射する。
比較的近距離で発砲したため、発射された３発の弾丸は１体のゾンビの顔面に命中し、ゾンビを絶命させた。

「オラァ！！」

残っていたゾンビは一文字のハイキックが首に直撃し、頚椎から鈍

い音がした後壁に叩きつけられ動かなくなった。

「ハッハァ！！　弱っちいねえオイ！！」

「バカ野郎後ろだ！！」

調子に乗った一文字が油断していると、別の入り口から新手のゾンビが出てきた。

敬は素早く狙いをつけると、セミオートで発砲した。

弾丸は一文字の頭を掠め、ゾンビを瞬く間に撃ち殺した。

「うおい！？　今掠ったぞ！？すぐ傍でチッて聞こえたぞ！？」

「うるせえ！！　生きてんだから気にすんな！！」

「気にするわ！！」

言い争いながらも、２階の突き当たりにある階段へと向かう。そこからしか3階の生徒会室へは行けないのだ。

途中の部屋から出るゾンビは白兵戦が得意な一文字と黄泉が部屋へと押し戻し、何とか階段へとたどり着く。

「にしてもよお！　いつの間にここはゾンビの巣窟になったんだよ！？」

「しかもここの生徒や教師ばっかだし。」

階段を駆け上がりながら、一文字と野辺は疑問を口にする。

「それなら大体の見当はつく。けど今考えることじゃねえぞ！」

「その通りだ。今は走ることに集中しよう。」

敬と黄泉にたしなめられ、２人は黙って階段を上がる。階段を上がりきると、敬と野辺は階段を上がってくるゾンビを迎え撃つため残

り、一文字と黄泉は生徒会室に向かう。
一文字と黄泉が階段を上がってすぐに右に曲がると、大きな扉が現れた。上には「生徒会室」と書かれたプレートが付いていた。

「オイ早く開けろ！！」
「分かっている！！」

一文字に急かされながらも、黄泉は素早く鍵を取り出して鍵を開ける。
黄泉は扉を開けて中を安全を確かめる。すると、中には2人の男子生徒がいた。

「ヒイ！？」
「だ、誰だ！？・・・会長！？　生きていたのか！？」
「悪いが話は後だ！！」

黄泉は中を調べ、バリケードに使えそうな机や椅子、様々な書類や本が入っている戸棚を確認すると、一文字にＯＫを伝える。既に階段からは銃声が聞こえていた。

「大丈夫だ！！」
「おし！　敬！　野辺！いいぞ！！」

階段には数体のゾンビが頭部を撃ちぬかれて転がっており、下の階からは続々とゾンビが集まっていた。敬は一文字の声を聞くと、階段を上がってきた片腕が無い学生のゾンビを撃ち殺してから野辺とともに後退した。

「野辺！防火扉閉めろ！！」
「オッケー！！」

敬が下がると、野辺が防火扉を閉める。防火扉は室内の方から押して開くため、階段側から押しても開くことは出来ない。
これでしばらくゾンビの侵入を抑えることが出来る。
2人は生徒会室へと走り、飛び込む勢いで中に入る。扉は一文字が押さえており、敬と野辺が入ると急いで扉を閉める。

「何とかなったか・・・・。野辺、グッジョブ。」
「ふん、当然よ。・・・まあ敬も頑張ってくれたしね。」

敬は、防火扉を閉めた野辺へ賛辞を送る。野辺も、軽口を叩きながら敬へ労いの言葉を掛ける。
2人が休んでいる間、一文字は扉に張り付き、外の様子に神経を集中させている。

「敬、ゾンビ達は？」
「防火扉閉めといたから、ある程度は食い止められる筈だぜ。」
「まあ、連中がどれだけの腕力を持ってるかなんて知らないから、どれほど持つかは分かんないわよ。」

部屋の外からは次第に大きくなっていくうめき声が聞こえてきた。
しばらく扉に耳を当てていた一文字だが、やがて耳を離して敬の近くに移動する。

「防火扉叩く音はあんまし大きくなってねえから、しばらくは大丈夫じゃね？」
「ん、そうか。」

敬は一文字の話を聞き終わると、先にいた2人の男子を見た。

「え～と、誰？」
「・・・直球だな。」
黄泉は呆れながらも、部屋の奥で椅子に座っている眼鏡を掛けているショートヘアーの男子を紹介する。
「彼は今田戒（いまだかい）。生徒会で副会長を務めていた。」
紹介された今田は、敬達を見下すような目で見ていた。
「ふん。まさか会長が校内一の不良と、その相方を連れてくるとはな。」
「ああ？　何か文句あんのか？」
今田の偉そうな態度に、一文字が食って掛かる。
「大有りだ。貴様らのような人種はすぐに他人を見捨てるだろうからな。」
「ハッ！　俺はむしろ手前みてえなインテリ君の方が疑わしいがな。」
「何だと・・・？」
互いに相手のことが気に食わないのか、瞬く間にけんか腰になる2人。
「イチ、止めろ。今はんなことやってる場合じゃねえだろ。」
「敬・・・。」
一文字は敬に唯一呼ぶことを許可しているあだ名で呼ばれ、敬の方を見る。敬は真っ直ぐに一文字を見据えており、一文字はそれを見

てからようやく矛を収めた。

「・・・わりいな。」

「ま、お前に頼まれちゃあな。」

2人は互いに笑みを浮かべあう。今田はそれを面白くなさそうに見ていたが、不意に黄泉から声を掛けられる。

「今田。今のは言い過ぎだぞ。」

「しかし会長、あいつは・・・。」

今田は黄泉の叱責に反論しようとするが、黄泉はそれを遮る。

「相手を上辺や肩書きだけで判断するな。少なくとも、彼等は信用できるのだからな。」

「・・・。」

今田は不服そうだったが、特に言い返しはしなかった。

敬はもう1人の方へと振り向いた。

「お前は?」

敬に話しかけられた、坊ちゃん狩りの髪に小太りの体型。卑屈そうな目をしている少年は、少しビビリながらも口を開いた。

「ボ、ボクは松村栄治(まつむらえいじ)です・・・。」

「松村か・・・。よろしくな。」

敬はそう言うと笑顔を浮かべ、握手を求めて手を伸ばした。

「ハ、ハイ・・・。」
松村も遠慮がちに手を伸ばして握手をした。
握手を終えると、敬は松村に他の生存者について尋ねる。
「なあ、この部屋に逃げ込んだのってお前らだけなのか？」
「あ、隣の部屋に・・・。」
松村が部屋の奥にある扉を指差すと、丁度その扉が開くところだった。
中からは、血の付いたゴム手袋を外している白衣を着た女性が現れた。
１６４ｃｍほどの身長で、背中の肩甲骨の辺りまで伸びている茶色がかった髪。無表情だが整った顔立ち。服の上からでも分かる女性特有の膨らみ。
彼女は敬を見ると、目を見開いて驚きを表していた。
敬と一文字も彼女が誰だか分かると驚きの声を上げた。
「夕日さん！？　無事だったんですか！！」
「おお、夕日さんじゃん。ご無沙汰～。」
「ケイ・・・くん？」
敬と一文字はこの学校で校医を勤めている小川夕日（おがわゆうひ）が無事だったことに喜びながら、彼女に近づいていく。
夕日は手袋を捨てると、いきなり近づいてきた敬に抱きついた。
「え、ちょっ、夕日さん・・・？」
突然のことに驚き、抱きついてきた夕日の顔を見る敬。敬の体をしっかりと抱きしめている夕日は、涙を流していた。

「心配・・・した。」

夕日は顔を敬の胸に埋めながら、ゆっくりと喋りだした。

「ケイくん・・・見当たらない・・・・・。ゾンビみたいなの・・・・・一杯・・・。怖かった。ずっと・・・・・不安だった。」

「・・・・。」

自分の胸で泣いている夕日が、どれだけ不安だったのか。どれだけ自分の安否を心配していたのか。

それを考えて、敬は申し訳ない気持ちになった。

だからこそ、あえて明るい声で夕日を慰めた。

「大丈夫ですって。俺は急に居なくなったりしませんし、何かあっても必ず夕日さんの下に戻りますから。」

「・・・本当？」

夕日は顔を上げると、未だ泣き止む様子を見せない目で敬を見つめた。

敬は夕日と目を合わせ、力強く頷いた。

「怪我したら夕日さんに手当てしてもらわなきゃいけませんから。」

それでようやく安心したのか、夕日は表情を僅かに綻ばせると、敬から離れた。

敬が夕日を慰めている間、一文字は野辺の方を見ていた。野辺はあ

まり気にしてはいないようで、特に変わった様子は見られなかった。少し不思議に思った一文字は野辺に話しかける。

「珍しいな。夕日さんに嫉妬しないのか？」

「敬から事情聞いたからね。まあ大目に見てあげようかなって。」

野辺の言う事情とは、夕日が片言で話している理由でもある。夕日は一度チンピラに誘拐され、強姦されそうになったことがあった。そのときの恐怖により、他人と話すときに片言になってしまうのだ。

その時は幸いにも、偶然現場を通りがかった敬と一文字によって助け出され、事なきを得たのだ。それから夕日は助けてくれた敬に少しでも恩返しをしようと、校医になって敬の面倒を見ているのだ。

「でも、あっちはそうでもないみたい。」

「あっちって？」

野辺は無言で指を指す。一文字がその方向を見ると、険しい顔つきになっている黄泉が目に飛び込んできた。

どうやら夕日のハグを見て知らず知らずのうちに不機嫌になっているようだ。

「ありゃあ・・・。随分と不機嫌そうで・・・。」

「結構独占欲強いんじゃない？　かなり嫉妬してるわよアレ。」

黄泉の不機嫌そうな顔を見て、思わず引いている一文字。野辺は冷静に観察している。・・・実は、野辺も内心では「アタシの敬に抱きついてんじゃないわよ！！」などと思っているのだが、ここで怒鳴り散らすのはいけないとは思っているので口に出したりはしなかった。

一方、黄泉はそんなことには全く気づかず、自分の中で湧き上がる黒い感情を持て余していた。

（私は・・・嫉妬しているのか？）

敬に抱きついている夕日を見て、羨ましさと妬ましさが同時に湧き上がり、自分でも戸惑っていた。

（・・・落ち着け・・・。彼は別に彼女と付き合っているのではないようだし・・・いやいやいや！　何を考えてるんだ私は！？）

段々と混乱してきた心中を何とか周りに悟られないにようにしつつ、黄泉は夕日が敬から離れたのを見計らって質問をした。

「と、ところで夕日先生。隣の部屋でなにを？」

黄泉から尋ねられた夕日は、まだ抱きついていたかったのか、少し物足りなさそうな顔をしたが、すぐに元の無表情に変わると質問に答えた。

「怪我人・・・手当てしてた・・・。」

「怪我人？　どんな怪我？」

「噛み傷・・・多い。」

「！？　ホントですか！？」

敬は「噛み傷」が多いことを聞くと、慌てて夕日に確認をとる。夕日は敬の剣幕に驚きながらも頷いた。

「くそっ！！」

それを見て、敬は悔しそうに叫んだ。大半の者は何故敬がそのような反応をしているのか分からず、目を白黒させていたが、黄泉だけは敬の考えを理解しているらしく、険しい顔つきになっていた。

「会長、一体何なんですか？」

今田が尋ねると、黄泉は一文字と野辺にあることを尋ねた。

「一文字に野辺・・・・。ここに来るまでにゾンビと戦っていて、違和感を感じなかったか？」

「違和感？あったかんなモン？」

「ちょっと待って・・・・。」

野辺は顔を俯かせて校舎内での戦闘を思い返していく。すると、あることに気づき顔を上げた。

「校舎内で相手したゾンビは皆教師や生徒ばっかだった！」

「正解。」

敬は野辺の解答を肯定すると、さらに補足を加えていく。

「校舎内に逃げ込む前に見たゾンビどもは、かなり損傷が激しい奴もいたけど、皆年齢も服もバラバラだった。けど、校内に居たゾンビは教師や生徒ばかり。つまり、なんらかの理由でゾンビになっちまったってことだ。」

「で、でもどうして・・・・。皆さっきまで普通だったじゃないか。」

松村が信じられないといった様子で反論する。無理もないだろう。１時間前まで話をしていたクラスメートが、自分を食い殺そうとしてくるのだ。信じたくはないだろう。

「・・・噛み傷。」

すると、夕日がポツリと呟いた。小さい声だったため、聞き取れなかった今田が聞き返す。

「今何と？」

「・・・感染経路・・・。」

単語だけしか話さない夕日との会話は、慣れていない今田には少々理解しにくかった。

代わりに黄泉が説明をする。

「交戦したゾンビには、全て捕食されたような傷があった。つまり、ゾンビに噛まれたものは・・・。」

黄泉が結論を言おうとしたとき、不意に隣の部屋、怪我人が居る筈のドアが叩かれた。

全員が驚いてそちらを見ると、誰かが向こう側からドアを叩いており、ドアが破壊されるのは時間の問題だった。

「おい、まさか・・・。」

一文字が呆然と呟く。黄泉が告げようとした結論に気づいたのだ。

他の者も、答えに気づいているらしく体を身構えている。

敬は近くに居た一文字と夕日を下がらせつつ、Ｍ４を扉へと構えていた。

そして、ついに扉が破壊された。

「・・・嘘・・・・。」

夕日が呆然と呟く。扉から出てきたのは、彼女が治療した生徒だった。しかし、既にゾンビへと変わってしまっていた。

敬は、黄泉が言おうとした先を答える。

「噛まれたら、ゾンビになる・・・・。」

時間が経つごとに、自分達がどれだけ絶望的な状況なのかが明らかになっていく。

希望は、いつ見えてくるのか・・・・。

第5話：生徒会室での戦闘（前書き）

今回から、主人公を漢字では無くカタカナで書いていきます。
・・・見にくいんで。

第5話：生徒会室での戦闘

ＰＭ１５：５５。

隣の部屋からゾンビ化して出てきたのは４体。ケイは銃口を一番近くにいるゾンビに向けつつ、後ろで袖を掴んでいる夕日に話しかける。

「夕日さん。治療した人数は？」

「・・・７人・・・。」

夕日が震える声で告げた人数に、ケイは内心舌打ちする。部屋の中にはまだゾンビが潜んでいるため、この４体を倒しても油断が出来ないためだ。

ケイはとりあえず、目の前の敵を殲滅しようと、引き金を引こうとしたとき、不意に右肩に手が置かれた。

驚いてそちらを見ると、一文字が獰猛な笑みを浮かべていた。

「こんなザコ相手に貴重な弾使うこたあねえだろ？」

ケイは一文字の言わんとすることに気づくと、呆れたように息を吐いた。

「しゃあねえな・・・。いっちょやってやりますか！」

ケイはＭ４を下ろすと、夕日を後ろに下がらせてから一文字とともにゾンビへと突っ込んでいく。

「な！？　バカ戻れ！？」

黄泉が2人の突然の行動に驚く。てっきりケイの狙撃で片付けると思っていたら、2人は素手で突っ込んでいったのだ。

しかし、2人は黄泉の制止を聞くことはなかった。

ケイと一文字は、1体のゾンビの近くまでくると左右に分かれ、2人は同時にゾンビの首へハイキックを繰り出した。

『ハア！！』

蹴りは真っ直ぐに首筋に直撃し、ゾンビの首からは鈍い音が聞こえた。

ゾンビが糸の切れた人形のように崩れ落ちている間に、ケイは襲い掛かってきた2体目のゾンビを避けると、ついでに足を引っ掛けて転ばせた。

転がった先には一文字がおり、一文字は躊躇うことなく倒れたゾンビを頭を踏みつけた。

ゾンビの頭はぐしゃりとスイカのように砕けた。

ケイは一切一文字の方を見ることなく次のゾンビへ向かっていく。

3体目のゾンビは食いちぎられたのか指が何本か無いにもかかわらず、その手を伸ばしてきた。ケイは冷静に左横に移動してかわすと、ゾンビの腕を掴み、思い切り振り回す。

急に引っ張られたゾンビは抵抗することすら出来ずに壁に叩きつけられる。

壁に叩きつけられたゾンビは血の跡を残しながら床に崩れていくが、膝立ちになったところで、ケイが駄目押しの膝蹴りを頭部にぶち込んだ。

壁とケイの膝に挟まれ、ゾンビの頭蓋骨はあっさりと砕けた。先程より多くの血を壁に付着させながら崩れていくゾンビ。

一文字も負けていなかった。彼はゾンビへ真っ直ぐ向かっていくと、ゾンビの顔面に左フックを叩き込んだ。生来の怪力により、かなりの重さで叩き込まれたフックは、ゾンビを壁に叩きつけた。
一文字はゾンビが怯んでいる隙に傍に近づくと、ゾンビの頭部に右ストレートを叩き込んだ。
壁と拳に挟まれ、ケイに倒された3体目と同じような状況になっているが、結果は違っていた。
ケイのときは頭蓋が割れただけだが、こちらは完全に潰されていた。コンクリートの壁に穴を開けるほどのパンチ力を持つ一文字だからこそ出来た芸当だった。

「うわ、キタネエ。」

一文字は血の付いた拳を見て顔を顰める。取りあえずゾンビの服で比較的汚れていないところで拳を拭いていた。
そこへ、膝に血が付いているケイが近づいてきた。

「まさか拳で殴りつけるとはなあ・・・。そうなることぐらい予想しとけよ。」
「う、うるせー。倒せたんだから別にいいだろ。」

直前までゾンビ相手に凄まじい戦いを繰り広げていたとは思えない軽口の応酬に、黄泉・松村・今田は呆然としていた。

「な、何て強さだ・・・。」
「す、凄い・・・。」
「ば、バカな・・・。」
「ま、当然よ。」

3人が呆然としていると、野辺がまるで自分のことのように偉そう

にしていた。
今田が野辺に尋ねる。
「おい、どういうことだ。一文字の方は納得できるが、崎沼があれだけの強さを持っているのは何故だ。」
今田の疑問に、野辺はつまらなそうに答えた。
「ケイは一文字の相方で、大抵は一緒に行動してるのよ？　一文字の喧嘩に巻き込まれるなんて日常茶飯事。そんで、何度も巻き込まれてるうちに喧嘩の腕が上達してったのよ。」
ま、元々の才能もあったらしいけど。野辺はそう付け加えた。
今田は驚きを浮かべて固まっている。松村は敬意に満ちた目で2人を見ており、黄泉はじっとケイを見つめていた。
夕日はケイと一文字の下に行き、怪我をしていないか調べている。
「怪我・・・無い・・・？」
「大丈夫だって。」
「そうそう。俺らがあんなノロマにやられるかっての。」
しかし、2人が無事だと分かっても、夕日の顔は暗くなっていた。
ケイはその理由に気づくと、俯いたままの夕日へ声を掛ける。
「・・・あいつらがゾンビになったのも、俺達が危険な目に遭ったのも、夕日さんのせいじゃないですよ。」
ビク、と夕日は体を震わせた。彼女は涙目になっており、今にも目から涙が流れそうだった。

「でも・・・・・！」

夕日が何か言おうとすると、ケイは夕日の頭に手を置いた。一文字は既に野辺のところに退避しており、野辺と黄泉の様子を見て楽しもうとという魂胆のようだ。

「何でもかんでも背負ったって意味は無いんですよ？」

優しげに微笑したケイ。夕日はそれを見て、微かに頷く。
ケイはもう心配ないと判断し、隣の部屋へと向かう。

「私も行こう。」

今度は一文字では無く、黄泉が付いてきた。ケイは黄泉に向かって笑みを浮かべる。

「油断すんなよ？」
「ふ、君こそな。」

黄泉も同じような笑みを返すと、ケイを先頭に中へと入る。
中は比較的狭く元は倉庫として使われたのか、壁に色々なものが置かれていた。
床は血で汚れており、どのようなことが起こったかを想像させた。
黄泉は油断なく目を光らせている。

「確か、後3人は居る筈だが・・・・。」
「・・・1人減ったぞ。」

黄泉より奥に行っていたケイが、ぽつりと呟いた。
耳を澄ますと、奥からは何かを咀嚼するような音が聞こえてきた。

黄泉は木刀を握り直すと、ケイの隣に立った。
奥では、2体のゾンビが女子生徒の死体を一心不乱に食らっていた。恐らくまだ正気のときに襲われたのか、食いちぎられて転がっている首には苦悶の表情が張り付いていた。

「う・・・！」

それを見て、黄泉は思わず呻いてしまう。口を押さえ、こみ上げてくる吐き気を抑える。
そのとき、黄泉の肩に手が置かれた。

「しっかりしろ。」

たった一言だけだが、それだけ聞こえれば十分だった。黄泉は何とか立ち直ると、ゾンビに向き直った。ゾンビもケイ達に気づき、死体を食らうのを止めて立ち上がる。
黄泉は黙って木刀を構えていたが、不意に喋りだした。

「ケイ・・・正直、私はあなたが居なければとっくに死んでいたでしょう。」

ケイは口を挟むようなまねはせず、黙ってゾンビを警戒していた。
黄泉も気にせず話していく。

「だから、今から私はあなたを信じ続けることにします。絶対に。」

最後まではっきり告げると、黄泉はゾンビへと向かっていった。ケイは苦笑すると、黄泉をサポートすべく黄泉の後に続く。
片方のゾンビは黄泉の木刀により、一撃で頭を割られて絶命した。
もう1体は攻撃直後の黄泉に襲いかかろうとしたが、横からケイの

足刀が首に叩き込まれて頚椎を破壊された。
2体を倒した後、ケイは黄泉に告げた。

「・・・あんまり頼るなよ。結構一杯一杯なんだからよ。」
「それは分かっている。信じるだけだ。」

平然と笑って返してくる黄泉に、ケイは諦めたように頭を掻いた。

加速度的に悪化していく状況の中、強くなっていく絆。
それは希望か、それとも絶望への扉か・・・。

第６話：休憩、そして襲撃

ＰＭ１６：１５。

ケイ達は、あの後ゾンビの死体を隣の部屋へ移動させ、簡単に弔った後、ここでしばらく休憩をすることになった。

階段の様子は分からないが、窓から見える範囲には何体ものゾンビがうろついていた。そのため、脱出するにも体力を回復させるべきとの意見が上がったのだ。

今、野辺・一文字・今田の４人は椅子に座って大人しくしており、ケイは座りながら野辺のＭ９２ＦＳと自分のＭ４の点検をしていた。点検といっても、残弾を確認したり、装甲車から回収しておいたＭ４とＭ９２ＦＳの予備の弾をマガジンに詰めてたりするぐらいだが。

この場に居ない黄泉と松村、夕日は死体が入れられた部屋の反対側にある給湯室でお茶を入れていた。

「・・・今更だけど、この部屋って随分用意がいいわね。」

「給湯室まであるしな。」

野辺と一文字が疑問を口にすると、今田が説明する。

「ここはたまに泊り込みをする部活が寝床として使うからな。向こうの部屋のガラクタも、部活の奴らが置いていったものばかりだ。」

「へえ・・・。」

今田の話に感心した様子の野辺。ケイと一文字は退屈凌ぎで聞いているため、あまり興味は無いらしい。

そこへ、黄泉と松村が人数分のお茶を持って給湯室から戻ってきた。

「どうぞ。」
「お、サンキュー。」
松村が一文字にお茶を渡すと、一文字は礼を言って受け取る。
「野辺さんもどうぞ。」
「ありがと。」
松村は野辺にも渡していく。
ケイと今田には、黄泉がお茶を渡していた。
「ほら、これでも飲んでくれ。」
「すまない会長。」
「おお、サンキュ。」
ケイと今田はそれぞれ礼を言ってから受け取った。
一旦銃を置くと、ケイは湯のみに入れられたお茶をすすった。お茶は程よい温度になっており、ついつい爺臭いため息をつくケイ。
「あ〜。やっぱこうやってのんびりすんのって落ち着くな〜〜。」
「・・・年寄りみてえだな。」
「同感だ。」
珍しく一文字と今田の意見が合っていたが、言われた本人はどこ吹く風でまったりとしていた。
と、そこでケイは夕日がまだ給湯室にいることに気づく。
「夕日さんは？」
「彼女ならお粥を作っているぞ。何でもここにあった食材ではお粥が一番いいそうだ。」

「お、夕日さんの手作りか。」
「あの人、料理上手いからね。」
「へえそうなんですか。」

松村は一文字と気が合うらしく、野辺を含んだ3人で話を始めた。
それから5分はど経つと、夕日がお椀に入れて人数分に分けたお粥を持ってきた。

「出来た・・・・。食べて・・・・。」

それぞれの分を配り終えると、全員席についてお粥を食べ始めた。

「うめえー！」
「五月蝿いわよ。」
「これは文句なしだな。」
「うわあ、本当に美味しい・・・・。」
「ふむ、旨いな。」

それぞれが大絶賛している中、夕日は黙々と食べているケイに感想を聞く。

「・・・どう・・？」
「ん、旨いよ。野菜も入ってるし、最高だよ。」
「・・・良かった。」

ケイからも褒められ、夕日は少しだけ顔を綻ばせた。
普段の彼女を知る者からすれば、満面の笑顔に思えるほどの笑顔だった。
その後、食事中は終始穏やかな空気に包まれ、自分達の状況を忘れることが出来た。

やがて、食事が終わると夕日と野辺が片付けで給湯室に行き、残りは個人個人で休憩していた。そのとき、不意に松村が部屋のテレビがついていないことに気づく。

「テレビでも見ますか？」
「そうだな。まっちゃんつけてくれ。」
「僕ですか・・・。」

適当なあだ名をつけられてへこみつつ、松村はテレビの電源をつける。すると、予想外のものが写っていた。

「おいおい・・・。」
「これはまさか・・・・。」

一文字と今田が呆然と呟く。
テレビには、たくさんの報道陣が映っており、その後ろには全長１０メートルはあろうかという巨大な壁が、ずらりと並んでいた。
ケイはテレビに近寄ると音量を上げた。テレビでは、どこかのアナウンサーが現場から中継しているところだった。

「皆さん見てください！　先ほど伝染病が発生したと発表があった地域を、自衛隊と米軍があの巨大な隔壁で封鎖していっています！！」

アナウンサーの後ろでは車やヘリが何度も出入りしており、ときおりヘリやトラックで隔壁が運ばれていく。
丁度給湯室から戻ってきた２人が、テレビを見て驚愕の表情を浮かべる。その間もテレビは続々と情報を公開していく。

「今のところ封鎖された地域からの情報はありません。政府からの

発表では通信局で事故が発生したため携帯などの通信機器が使用不能になっているとのことですが、何故事故が発生したかなどは分かっておりません。」

「嘘・・・。」

野辺が呆然と呟いた。他の者も似たような心境らしく、テレビを食い入るように見つめていた。

「また、ヘリなどによる上空からの撮影も止められており、一部ではこれは米軍が関係しているのではとの意見も出されているようです。それではスタジオにお返しします。」

そこで中継は終わった。やがてスタジオが写ると、松村が電源を消した。

その場に重苦しい空気が漂い、誰も口を開こうとはしなかったが、やがて野辺が疑問を口にした。

「伝染病ってどういうことよ。これがそんな生易しいこと!?」

「落ち着けって。ゾンビが歩き回ってるなんて言ったって信じてもらえねえよ。」

ケイが興奮しだした野辺を抑える。

「それに、恐らく政府か在日米軍のどちらかが圧力を掛けているのだろう。でなければヘリでの撮影を許可する筈だ。」

今田はテレビで言っていたことを聞いて考えた推測を述べる。松村は納得いかないような顔をしている。

「でも、一体なんでそんなことを・・・。」

「なんかやましいことでもあんじゃねえの？」
一文字の一言に、黄泉が大きく頷く。
「多分そうなのだろう。どれほどの規模かは謎だが、少なくとも米軍・日本政府双方に関係者が居る筈だ。そうでもなければあの装甲車の説明が出来ないからな。」
「でも・・・対応・・・早すぎる・・・。」
「向こうでは予想されていたのではないか？」
今田の言葉に全員が振り向く。全員が振り向いたのを確認すると、今田は話を続ける。
「まず自衛隊がこれだけ早く出ていること自体がおかしい。普通なら周辺の警察が当たっているはずだ。」
「あんな隔壁を、あれだけ早く用意するのは難しいはずだしね・・・。」
「確かに・・・。」
「・・・何かどんどん黒幕がでかくなってってねえか？」
「実際かなりの大物なんだろ。でなきゃ米軍まで動くわきゃねえ。」
この事件を起こした黒幕。その存在が考えるごとに大きくなっていき、次第に不安げな表情を見せ始める。
そこへ、ケイは手を叩いて注目させた。
「おいおい、俺らは別に黒幕を倒すために考え込んでるんじゃないぜ？　ここから生きて脱出するためにこうやって集まったんだろ？　そんなことは脱出した後にしようぜ。」
ケイの言葉にいち早く反応したのは、付き合いが一番長い一文字だ

った。

「確かにな。そんなこと、後で考えりゃいいか。」

一文字が同意したことにより、他の者も段々と生気を取り戻していく。

「・・・ケイの言う通りね。そんなこと、後で考えましょう。」
「まあ、確かに優先すべきことでは無いな。」
「そうですよね、今は自分達の生還が大事ですもんね。」
「・・君は本当に強いな・・・。」
「・・ケイくん・・・。」

ようやくその場から暗い感じの雰囲気が消えると、ケイは不適な笑みを浮かべる。
その隣には、一文字が同じような笑みを浮かべて立っていた。

「さて、そんじゃ脱出プランでも考えようぜ。」

ＰＭ１７：００。

ケイ達は、机にこの街一帯の地図を開いてどこから脱出するかを話し合った。
なお、あまりこういうことに向いていない一文字と松村はテレビを

見て情報収集を行っていた。

「まず、川によって寸断されている所は行かない方がいいな。この街を完全に封鎖するために確実に橋が落とされている筈だ。」

そう言うと、隣街に繋がっている橋全てにバツを書いていく。

「となると、川が通っていない北西へ行くしかないか・・・。」

「そう簡単にはいかないと思うぜ。」

ケイの言葉に夕日があることを思い出す。

「外の・・・軍隊・・・。」

その一言で、周囲の者もケイが何を言いたかったかに気づく。

「まさか・・・、連中が妨害してくるとでも？」

「ありえなくは無いわよ。・・・しかも今この街は＜伝染病が流行っている＞ってことになってるし、街の人間を出ないようにする理由にはなる筈よ。」

「くそ・・・、どうする？」

黄泉から尋ねられたケイは、しばらく顎に手を当てて考え込むと、やがて警察署を指差した。

「脱出方法が見つからない以上、身の安全を重視した方がいいと思う。まずはここから徒歩で２０分ぐらい歩いて警察署を目指そう。武器を手に入れたい。」

「それは構わないが、市街地を歩いて大丈夫なのか？　下手をすれば、この街の住民はほとんどゾンビになっている。警察署に行くに

は人通りの多いところを必ず通らなければならないぞ。」
「それは心配しなくてもいいと思うわ。ゾンビはそれほど知能があるわけじゃないみたいだから結構バラバラに動いてるし、大半は外の獲物を狙って隔壁のところまで行ってるんじゃないかしら。」
「ゾンビ達がどう行動しているにしろ、銃は必要だろう。」

ケイの意見に黄泉が指摘を入れたが、野辺と今田が肯定的な意見を述べた。黄泉もそれ以上言うことは無いのか、反対することは無かった。

「そっちはどうだ？」

ケイはテレビを見ている2人に尋ねる。すると、一文字はいいものを見つけたかのような顔をしていた。

「いいネタがあったぜ。どうやら一度ここに在日米軍の一個小隊が送られたらしい。けど、通信が途絶えているって話だ。」
「後は、街から無事に脱出できた人はいないそうです。」
「山田くん、まっつんの座布団一枚持っていきなさい。」

一文字が松村の学ランを剥ぎ取ろうとする。松村は驚きながらもしっかりと抵抗して学ランを取られないようにしていた。

「まっつん！？　てちょっと一文字さんなんで学ラン取ろうとするんですか！！その前に何で取られるんですか！？」
「オチが酷かったから。」「座布団の代わり。」

松村は、学ランを取ろうとする一文字から逃げ回るが、途中でケイも捕まえる側に参加し始めた。
松村がそのぽってりした体とは裏腹な運動神経でしゃがんだり横っ

飛びをしたりテンプシーロールなどをしてケイ・一文字と死闘を繰り広げている間、残りの４人はそれを無視して話を進めていた。

「目的地は決まったが、足はどうする？」

「そうだな・・・。夕日さん、車の免許は持ってますか？」

黄泉が聞くと、夕日は躊躇いがちに頷いた。そのとき、松村はケイに羽交い絞めにされていた。

「持ってる・・・。けど・・・いつも電車使ってるから・・・。」

「・・・あんまり運転したこと無いのね・・・。」

野辺が呆れながら言うと、夕日はこくりと頷いた。

松村を羽交い絞めしていたケイは、火事場の馬鹿力を引き出した松村によって一文字へと投げられ、２人は重なって床に倒れ込んだ。

「ぐおお・・・。」

「い、意外と強いなまっつん・・・。」

ダメージが大きかったのか、よろよろと起き上がる２人。松村はその隙に黄泉達の所へ避難していた。

松村は体を震わせながら、余程消耗したのか荒くなっている息を整えつつ黄泉達に助けを求める。

「た、助けてください！！　あの２人、変なんです！！」

野辺は静かに松村の背後に回ると、肩をがっしりと掴み、逃げられないようにし、２人に命令を下した。

「・・・山田くん、２枚持ってきなさい。」

『イエッサー！！』
「えーーーーーー！？」
「お前らいい加減にしろぉ！！！！」
その後、被害者である松村を含めた４人は、堪忍袋の緒が切れた今田にこってりと説教をされた。
「何で僕まで・・・。」
松村がぶつぶつと文句を言っていたが、その内元通りになるだろうと、誰も相手にしなかった。
今田は大声で説教をしたため、しばらく休憩していた。
一方説教された当人達は平然としていた。
「んで、結局どうなったんだ？」
「聞いていなかったのか・・・・。」
おもいっきり肩を落とす黄泉だが、すぐに気を取り直すと、夕日とともに決めておいたことを教えていく。
「取りあえず移動は徒歩になった。車を運転できる人がいないからな。」
「あれ？　夕日さん免許持ってたろ確か。」
「夕日さんいつもは運転しねえからな・・・。」
「アレ？　そういえば２人って車運転してなかった？」
『シーーーーーー！！！？』
ケイと一文字は慌てて野辺の口を塞いでそれ以上は言わせなかったが、黄泉は聞き逃さなかった。

「・・・どういうことだ？」
「いやいやいやいや、何でも無いって。」
「そうそう。空耳だって。」
「私・・・乗ったことある・・・。」
『ノーーーーー！！！？？』

今度は夕日の口を塞ぐ。が、もはや言い訳は不可能だった。

「・・・話してもらおうか・・・。」

無表情で木刀を突きつけてくる黄泉に、２人が逆らえる筈も無かった。
ケイは何故か正座しながら話し始めた。

「えっと・・・、前にこいつの所為で筋モンに追いかけられたときに仕方なく・・・。」
「あのときはお前の運転で死にそうになったな～～。」

懐かしむように遠い目をしている一文字。

「あと、夕日さんを助けるときも使いました。」
「え、何で？」
「いや～、夕日さんを助けたのは良かったんだけど、その後追っ手がきやがったんだよ。んで、それがエー○ェント○ミスみてーにわらわらと増えてったんだ。」
「・・・３０人ぐらい居た・・・。」

夕日がぼそりとそのときの人数を教える。

「それで、それから逃げるために使ったと？」

「ああ。」

黄泉はそれを聞くと、諦めたように息を吐いた。

「仕方ない・・・。もう時効ということにしておこう。」

「・・・あんがとな。」

「・・・話は済んだか？」

そこでようやく今田が復活した。黄泉はまだ全部伝えきっていないのを思い出し、慌てて話を再開しようとする。

そのとき、階段の方から大きな音がした。室内に緊張が走り、ケイは置いておいたＭ４を肩に掛け、黄泉は木刀を構えた。野辺と一文字はベレッタＭ９２ＦＳをホルスターに入れ、今田と松村は隣の部屋から見つけてきた金属バットを構える。

「まさか・・・！！」

それぞれが臨戦態勢に入ると、一文字は急いで部屋の外に出る。すると、階段前の防火扉が無理やりこじ開けられ、ゾンビがこちらに侵入してきていた。

一文字はそれを確認すると、舌打ちをしながら中に戻り、防火扉が破られたことを報告する。

「くそ！！　突破されちまってるぞ！！」

「ドアを封鎖するんだ！　急げ！」

今田の指示により、男性陣は室内にあった机や椅子を入り口に積んでいく。

「私達は脱出の準備だ！！」

「了解！！」
「イエス、サー・・・。」
女性陣は部屋の窓際に設置されている、災害時に階段から下りられなくなったときに使われる救助袋の準備を始めた。
段々と入り口の前に物が積み重なっていくが、固定が充分にされていなかった。しかも、遂にゾンビどもが扉までたどり着き扉を叩き始めたのだ。
ゾンビどもはかなりの腕力があるらしく、叩かれる度に積み重なったバリケードが揺れ動いた。
「うおお！？　どんだけの力で叩いてんだよ！？」
一文字が慌てて抑えにかかる。
「僕も手伝います！」
松村も続いて押さえるが、扉の耐久性がどれだけ持つかは疑わしいものだった。
そのとき、救助袋の順部が終わり、救助袋の出口が下に下りた。
「こっちは準備オーケーよ！！」
「おし！！」
ケイは救助袋の横の窓まで来ると、出口の周辺に居るゾンビを狙撃していく。距離は数十メートル離れていたが、発射された弾丸は標的を外すことなく捕らえていく。次第に地面に倒れているゾンビの数が増えていく。
「凄いわね・・・・一発も外してないわよ。」

「もはや神業だな・・・。」
「無駄話はいいから早く降りろ！　黄泉、先に降りて安全を確保しろ！！」
「分かった！」

黄泉は素早く救助袋に入り込むと、下へと滑っていく。
構造上地上に着くころには結構なスピードで落下しているが、黄泉は足を使って速度を抑えた。救助袋から出ると、丁度救助袋の裏に居たゾンビが襲い掛かってきた。
黄泉は木刀を振り上げてゾンビの顎を打ち、顔を上に向かせるとそのまま突きを叩き込んだ。木刀は顎を貫通して頭部まで届き、ゾンビの脳を破壊した。
そのまま倒れようとする勢いを利用して木刀を抜くと、周囲を警戒する。

「次だ！」

ケイが銃撃を行いながら催促すると、野辺が体を滑り込ませた。
野辺は無事に救助袋から出ると、Ｍ９２を抜いて黄泉と背中合わせに立つ。
周囲には段々とゾンビが集結しつつあった。

「やれやれ・・・、随分と集まってきたな・・・。」
「しっかりと歓迎してあげようじゃない。」

２人は互いに笑みを浮かべると、ゾンビへ向かっていった。

「次は夕日さん行ってください！」
「・・・分かった。」

夕日は頷くとすぐに降りていった。
ケイは弾切れになったＭ４のマガジンを変えながら、ドアの前に居る３人に怒鳴る。

「おい、次はお前らだ！！」
「分かった！！・・・・松村、先に行け！！」
「え、でも・・・。」
「俺が代わりに押さえる。だから早く行け！！」
「・・・分かりました！」

松村は急いで救助袋まで行くと、素早く中に入っていった。

「ハイ次！！」
「今度はお前が行け！！」
「・・・頼んだ！」

次に今田が救助袋に入り込み、地上へと降りていく。

「く、もうもたねえ・・・。」

既に扉の金具は破壊されており、一文字の怪力とバリケードで何とか保っていたのだ。
ケイはＭ４を担ぐと、一文字に向かって大声で叫んだ。

「イチ！　今から合図したらこっちに突っ走れ！！」
「ＯＫ！！　急いでくれよ！！」

一文字が急かすと、ケイはカウントダウンを始めた。

「行くぞ！　３・・・・・。」

扉がミシミシと限界を告げる音を出し始める。

「2・・・・・・。」

ケイが救助袋の入り口に乗っかり、降りる用意をする。

「1・・・・・！」

一文字が体をケイの方に向ける。

「0！！」

「ＧＯＧＯＧＯ！！！！」

ケイは０を告げた瞬間に降り、一文字は叫びながら扉から離れて救助袋へと走る。一文字が離れると同時に扉は完全に破壊され、大量のゾンビ達が侵入してきた。

一文字はすぐに救助袋にたどり着くと、素早い身のこなしで降りていった。

ケイは地面に着いてすぐに救助袋から離れる。その数瞬後に一文字が降りてきた。

黄泉は近寄ってきたゾンビの頭に木刀を叩き込んでからケイと一文字を確認した。

「よし、全員揃ったな！！」

「それじゃ急ぐわよ！！　皆走って！！！」

野辺の言葉に全員が頷くと、学校から脱出するために全力で走り出した。

めまぐるしく変わっていく状況。一切落ち着けない状態は、果たしてどこまで続くのか。

第6話：休憩、そして襲撃（後書き）

ミスりました・・・。

書きすぎていつの間にか展開が早くなってしまった・・・。

第7話：鮮血の脱出劇

ＰＭ１７：２０。

辺りは既に薄暗くなっていた。

生徒会室から脱出したケイ達は警察署に向かうため、学校から脱出しようとしていた。しかし、大量のゾンビが門の前に集まっていたため脱出が出来ず、校内を移動しながらゾンビと戦っていた。

「うおおお！！！」

ケイは雄叫びを上げて走りながらＭ４を連射する。フルオートで発射される弾丸は狙いが甘くなってしまい先ほどよりも無駄弾を消費してしまうが、前方にいるゾンビ達は瞬く間に倒されていく。

「ウオラァ！！！」

「はあ！！」

ケイの後ろでは、左右に一文字と黄泉がついていた。

一文字は掌打や蹴りで近づくゾンビを吹き飛ばし、黄泉は木刀の一撃で一体づつ確実に仕留めていく。２人はケイの銃撃の範囲外から近寄ってきたゾンビ達を迎撃し、進行が妨害されないようにしていた。

「この、この！」

黄泉達２人の後ろでは、野辺がケイ以外のメンバーに援護射撃を行っていた。

元々射撃が上手いわけではなく、さらには射程距離が短い９ミリハ

ンドガンを使用しているため外すのも多かったが、弾丸が着弾時の衝撃によって相手にダメージを与えることを重視するホローポイント弾だったため、胴体に当たっても動きを止めることが出来た。そのため、ゾンビが近くに来ても野辺の援護射撃により事なきを得ることが出来た。

「ふん！」

「うわあああ！！」

今田と松村は最後尾でバットを振り回し、ゾンビの頭をかち割っていた。

今田は近くまで来たゾンビのみ殺害し、それ以外は足を叩き割ったりして足止めをするだけに留め、体力をあまり使わない戦い方をしていた。

松村はこういう修羅場に対する免疫が皆無だったため、半ばパニックになっていたが、それでもゾンビの迎撃と皆についていくことは忘れなかった。

夕日は攻撃手段を持たなかったので、中央で怪我人の手当てが出来るように待機していた。

「くそ！　いい加減しつこいぜ！」

一文字がゾンビを殴り飛ばしつつ叫ぶ。

「このままでは体力が尽きてしまうぞ！」

黄泉は掴みかかってきたゾンビを受け流し、避けられたゾンビが通り過ぎるとその背中を蹴り飛ばした。蹴られたゾンビは他のゾンビを巻き込んで地面に倒れ込んだ。

（くそ！　どうする・・・。）

ケイはＭ４が弾切れになったため、近寄ってきたゾンビをストックで殴りつけながら必死で考える。
既に先程から続いている戦闘により、全員の体力はかなり消耗している。このままではいずれ全滅してしまうだろう。

（考えろ・・・、どんなときにも必ず突破口はある・・・。）

同じく今田も、ゾンビの首にバットを叩き込んで頚椎を折りながら突破口を考える。

（全ての門にはゾンビが集まっていた・・・。）
（一番少なかったのは西門・・・だけどこの装備じゃ突破は無理だ。）
（塀は高いから登るのは不可能・・・、となるとやはりゾンビをどうにかしなければ・・・。）
（でかい火力があれば・・・。）

２人が必死で対抗策を練っていると、不意に夕日が呟いた。

「あんなにたくさんだと・・・車でも通れない・・・。」
（（・・・車・・・？））

その言葉を偶然聞いていた２人は、あることを思い出し、同時にそれを叫んだ。

「「装甲車だ！！！」」

２人はお互いを見ると、頷きあって装甲車が放置してある昇降口下

に向かう。他のメンバーも慌てて後を追う。

「い、一体どうしたのだ！」

黄泉は2人の突然の行動に戸惑い、その真意を尋ねる。
ケイは笑みを浮かべて説明をする。

「夕日さんの一言で思い出したんだよ！　あの装甲車なら、ゾンビの群れを突破できるかもしれない！！」

「それホント！？」

野辺がようやく現れた突破口に食いつく。

「恐らくな。だが、それには運転手が必要だ。」

今田はそう言うと夕日を見た。夕日は自分が何をすればいいか理解したのか、力強く頷いた。
それを確認すると、ケイはＭ４のマガジンを交換しながら全員を叱咤する。

「こっからが正念場だ！　気引き締めろ！！」

『おお！！』

全員が一斉に返事をすると、装甲車へ突っ走る。

「うおおおおお！！！」

「だらあああああ！！！」

松村と一文字が雄叫びを上げながら先頭に立ち、進路上に居る邪魔なゾンビを蹴散らしていく。

ケイと野辺は夕日を庇いながらゾンビを狙撃していく。

「ふん！」

「かああ！！」

黄泉と今田は気合の入った声を出しながらゾンビを殴打していく。全員が一丸となって戦い、ついに装甲車へたどり着いた。

一文字・黄泉・野辺は装甲車の外に残って時間稼ぎの役を行い、運転手である夕日は急いで装甲車の運転席に座り、なんとか動かそうとするが、普通乗用車とは勝手が違うため、かなり手惑っている。やることの無い今田と松村は黙って中で座っている。

そしてケイは中に入ると急いでガンポートに上がり、車体上に据え付けられているベルト給弾式重機関銃ブローニングＭ２の準備をする。

安全装置を外し、射撃準備を終えると、下で戦っている３人に叫ぶ。

「お前ら中に入れ！　巻き添え食らうぞ！！」

ケイの言葉に真剣さを感じた３人は急いで車内に入り込んだ。仲間が外にいないことを確認すると、ケイはＭ２を掃射した。高速で発射される弾丸と、排夾されていく空薬莢。むせ返るほどの硝煙の匂い。

銃口から吐き出される１２．７ｍｍ弾は、近くに居た１０数匹のゾンビの集団を僅かな時間で肉塊に変えた。

次に、装甲車の周辺に来ていたゾンビ達に銃口を向けた。瞬く間にゾンビ達の手、足、指、血、肉片、骨などが辺りに散らばっていく。

「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

ケイの咆哮と銃声が周囲に響く。ケイは弾丸が発射されるごとに自

分の理性が擦り切れていくのを自覚していた。
装甲車周辺に血と肉片の海を作り終わると、ケイは西門へと銃撃を放った。

「らあああああ！！！！！」

西門の辺りに集まっていたゾンビ達も、ドンドン撃たれていくが、ついにＭ２の弾が切れた。Ｍ２が弾切れになると、ケイは車内に戻った。

「おいおい、外が血の海じゃねーか！？」
「ちょっと殺りすぎた！」
「これはちょっとじゃないでしょ・・・。」

車内に下りていくと、一文字と野辺が外の惨状を見てケイに話しかけてくる。しかし、言葉とは裏腹に特にケイを責めている風には見えなかった。
２人は気づいているのだ。これから先、これぐらいの惨状が山程あることを。だから言及したりはしなかった。

「夕日さん、どうですか！？」
「これで・・・、動く・・・！」

ケイが車内に入って聞くと、丁度夕日がエンジンを掛けたところだった。

「皆・・・・掴まって・・・・！」
「発進するぞ！！　何かに掴まれ！！」

ケイは怒鳴りながら降りてきた梯子を掴む。他の者も近くの手すり

などを掴み、衝撃に備える。

「行くよ・・・・！」

夕日は全速でバックした。装甲車は運転しながら背後を見れるわけではないので、進路上に教室棟の２階の渡り廊下を支えている柱があることに気づけなかった。

装甲車はゾンビを轢き殺しながら、渡り廊下の柱にぶつかり、そのまま柱を破壊してしまう。

「のおお！？」

「きゃあ！！」

「うわあ！？」

「うおっ！？」

いきなり来た衝撃に驚く車内のメンバー。

装甲車はそのまま走り、門から少しずれていたため塀を破壊して外に出た。そしてまた衝撃に襲われる車内。

「ゆ、夕日さん、もうちょっと優しく運転してくれ！！」

「ごめん・・・無理・・・。」

たまらず一文字が抗議するが、夕日の方は久しぶりの運転でかなりテンパっているらしく、ほとんどまともな運転が出来ないようだった。

そして、そのまま道路を挟んだ一般家屋に突っ込んでしまった。

車内は運転席に座っていた夕日以外、全員が体をどこかにぶつけていた。

梯子に顔をぶつけたのか、顔を押さえているケイは、小さな声で呟いた。

「・・・夕日さんの運転は死人が出るな・・・。」
「それは・・・同感だ・・・・。」
右即頭部を押さえている今田はケイの意見に同意した。今田はこの作戦に少なからず後悔していた。
「・・・トラウマになりそう・・・。」
「俺も・・・。」
床に転がっていた野辺と一文字がよろけながら立ち上がる。2人とも顔面が蒼白になっている。精神的なダメージは大きいようだ。
「ふう・・・、スリル満点なドライブだったな・・・。」
「もう車には乗りたくないです・・・。」
唯一平気そうな顔をしている黄泉。松村は青い顔をしている。しばらくは車に乗る度に震えだしそうだ。
散々言われた夕日は、何食わぬ顔で外に出ていた。
「う・・・。」
外は先程のケイの銃撃と装甲車での暴走により、道路に血の川が流れていた。恐らく装甲車が走った後に血の跡が残り、それが川になったようだ。
さらには元は人の形をしていたものが無残に散らばっており、医者である夕日ですら吐き気を催していた。
他の者も、外の惨状に言葉を無くす。
「く・・・これはひどいな・・・。」

「血の匂いがかなり濃くなっている・・・。」
「うわあ・・・・。しばらくお肉は無理ね・・・・。」
「・・・・グロッ。」
「・・・ホントにやり過ぎた。」
「う・・・オエエ！！！」

幸いにも吐いたのは松村だけだったが、全員これほどの惨状を実際に目にするのは初めてだ。精神面でダメージを受けていない者はいなかった。
そして、全員が悟っていた。
この惨状に劣らないものが、この先に待ち構えているであろうことが・・・。

「行こうぜ。じっとしてても意味ねえしな。」
「そうだな・・・。」

一文字とケイが歩き始めると、他のメンバーもそれについていく。
こうして、学校から脱出した7人は警察署へ向けて歩き出した。

闇は深くなっていくばかり。屍と肉片を積み重ねた先に、光は存在するのか・・・。

第８話：新たな生存者

ＰＭ１７：４０。

ケイ達は警察署へたどり着くため道幅が狭い住宅地を避けて、少し遠回りになるがゾンビが少ないと思われる通りを歩いていた。
ここに来るまでゾンビに会うことは無かったが、通りには血痕や千切れた体の一部分、放置された車や物が散乱していた。

「・・・ひどい。」

夕日は想像以上に酷い状態の通りを見て呟く。それは誰もが思っていることだった。
黄泉は歩道の血溜まりに子供の物と思しき靴が落ちていることに気づき顔をしかめる。

「・・・生存者はどれくらいだろうなのだろうか・・・・。」
「・・・あまり期待は出来そうに無いな・・・。」

黄泉の呟きに、今田が悲観的な観測を述べる。
いつもは気の強い野辺も、中で血が飛び散っている車や血で出来た足跡などを見て顔色が悪くなっており、今もケイの服を掴みながら歩いていた。
ケイも野辺を振り払ったりはせず、そのまま銃を構えて歩いていた。

「くそ、何か暗い雰囲気だな。ここは俺が・・・・。」
「止めておけ。絶対にすべるぞ。」
「今田、やらせとけ。たまにはイタイ思いをした方がいいんだよ。」
「何でこんなときだけ結託すんだよ！？」

一文字がボケようとするのを今田とケイが冷たい言葉で封じる。
思わず大声で突っ込むが、２人は見事にスルーしてしまったので、
一文字は諦めたように肩を落とした。

「くそう・・・。松村、お前は俺の味方だよな・・・？そうだよな・・・？」
「え、え～っと、すいません・・・・・無理です・・・。」

突然話を振られた松村だが、答える前にケイと今田に睨まれ、あえなく陥落した。
味方が０になった一文字は歩きながらいじけていた。

「どうせ俺は・・・ぶつぶつ・・・。」

しかも誰も一文字の相手をしないため、さらに一文字は拗ねていった。
ケイもそろそろ相手をあいようかと思い、声を掛けようとしたときだった。

「うあああああああーーー！！！」

突然男性のものと思しき叫び声が響いた。
ケイ達は驚きながらも声の発信源を探す。すると、夕日が少し離れたところにある、一軒だけ明かりが点いている二階建ての家屋を発見した。

「あそこ・・・！」
「む・・・あれか！」
「グッジョブ夕日さん！　皆急いで！！」

「言われなくても！！」

黄泉も続けて気づき、野辺が急ぐよう言うと、一文字が復活して走り出した。

全員が全速力で駆けつけると、家屋からはゾンビが2体出て来ていた。中にはまだいるらしく、唸り声とともにどこかのドアを叩く音がした。

「邪魔だ死人ども！！」

ケイは素早く狙いを定めると、2体のゾンビを速攻で撃ち殺した。

「ケイ！　今田！来てくれ！！残りはここで待機だ！！」

「分かったぜ！！」

「了解した！！」

黄泉が中に駆け込みながら指示を出し、ケイと今田は返事を返しながら黄泉とともに入り口へと向かっていった。

残りは家に近づくゾンビを蹴散らして脱出口を確保する。

「早くしなさいよ！！」

「分かりました！！」

「・・・気をつけて・・・！」

「油断すんなよ！！」

待機メンバーからの声を背に受けつつ、3人は中へと入った。

玄関を上がり、廊下を歩いていると、2階へ続く階段の横にあるガラス戸を突き破って老人のゾンビが飛び出してきた。

老人のゾンビは割れたガラスで体のあちこちを切っていたが、そんなことはお構いなしに向かってくる。

黄泉は素早く近づくと、階段までの道を塞いでいるゾンビへ渾身の突きをお見舞いした。
木刀は見事にゾンビの額に突き刺さった。黄泉がゾンビを倒すと、その横をケイと今田が通り過ぎていった。２人は黄泉が前に行くと、ゾンビの相手を彼女に任せて先に進むつもりでいたのだ。無論、黄泉がゾンビを素早く倒せるということが前提であったが、そのことには一切不安を抱いていなかった。
２人は今田を先頭にして階段を駆け上がり、２階に上がった。
２階では、たった今一番奥のドアが破られたところだった。廊下には４体ほどのゾンビがおり、２人に気づくとうめき声のような声を出しながら向かってきた。
今田はまるでゾンビが気にならないかのように走り出すと、ケイはＭ４をセミオートで連射した。弾は一発も外れることなく当たり、廊下にいたゾンビを全滅させた。
倒れていくゾンビの隙間を駆け抜け、今田はついに生存者がいると思われる部屋に入った。
部屋では壮年の男性がゾンビと掴み合いを演じており、もう少しでゾンビに首筋を噛まれそうになっていた。
今田はすぐに近づくと、体を左に一回転させ、遠心力をつけるとゾンビのこめかみの辺りに叩き込んだ。
頭蓋が割れる音とともに、ゾンビが男性から引き剥がされた。

「は、はああ・・・・。」

男性は安心して力が抜けたのか、その場に座り込んでしまった。
そのとき、他の部屋を調べていたケイが黄泉と一緒に合流した。黄泉とケイは今田と男性の無事を確認して安堵した。

「無事のようだな。怪我は無いか？」
「ああ、何とかね・・・・。君らが来てくれたお陰だ。ありがとう。

」
「いいっていいって。こんな状況じゃ、助け合わなきゃ生き残れないしな。」
「こいつの言う通りだ。気にしないでくれ。」
男性は3人の言葉を聞くと、右手を伸ばしてきた。
「じゃあ、手を貸してくれないか？　どうやら腰が抜けてしまったようでな。」
ケイと今田は苦笑しながら腰が抜けて立ち上がれない男性に手を貸し、立ち上がらせた。
黄泉は一旦ここで休憩することを提案し、外で待っているメンバーを呼んで来るため一階へ下りていった。

どれほどの地獄だろうとも、人はしぶとく生き残っていく。
果たして、神に嫌われ、地獄を駆け回る人間は後何人いるのか・・・・。

第9話：微かな休息

ＰＭ１７：５５。

ケイ達は先程助けた男性の家で休息を取っていた。中で殺したゾンビについては許可をもらって適当に近くの部屋に放り込んでおいた。今は僅かに血が残っているリビングで男性が出してくれた麦茶を飲んでいた。ちなみにいつでも逃げられるよう靴は履いたままだ。男性は自分の分の麦茶を飲むと、話を始めた。

「私は川井義男（かわいよしお）。警察官だ。今日は非番で父と一緒に家でのんびりしていたんだが、突然あのゾンビどもがどこからか現れてきたんだ。私は外に出るのは危険だと思い、家に篭っていたんだが・・・。」

「連中がなだれこんできたわけだ・・・。」

「ああ・・・。父は私を庇って食われ、私も君達がいなければ殺られていただろう。」

父親のことを話すとき、川井の顔色が僅かに曇った。恐らく、黄泉が倒した老人のゾンビは彼の父親だったのだろう。老人の死体を外に出すときも、彼は自分からその死体を持っていっていた。

「・・・お悔やみを申し上げます。」

黄泉は正座をしながら沈痛な面持ちで頭を下げた。殺害した張本人である

「いいんだ。むしろ父を楽にしてもらったんだ。私の方が謝罪するべきだろう。」

川井はそう告げて黄泉の頭を上げさせた。
その後、ケイ達も自分達の経緯を話し、これからどうするかを改めて話し合うことにした。

「ふうむ・・・。警察署か・・・。」

川井はケイ達の脱出プランを聞くと、テーブルなどをどけて床に広げた地図を見ながら顎に手を当てて考え込んだ。

「・・・何か問題でも？」

黄泉が尋ねると、川井は地図を指指しながら話をしていく。

「まず、ここから警察へ向かうには、必ず大通りか住宅地を抜けなければならない点だ。どこにゾンビがいるか分からない以上、この二つはあまり通りたくないな。」

地図を確認すると、今ケイ達がいるところから警察に向かうには、確かに住宅地と大通りのどちらかを抜けないといけなくなる。しかし、どちらも普段人が多くいるところであり、必然的にゾンビが多くいる可能性が高い場所だった。
次に、川井は一度2階に行き、黒い箱のような物を持ってきていた。

「？　何だそれ？」

壁にもたれてだらけていた一文字は、川井が持ってきたものに興味を引かれていた。

「これは無線機さ。父は昔通信士をやってたことがあったらしくてね。家でいつもいじっていては妙な放送を聴いていたんだ。」

「川井さん使えるんですか？」
「私も小さい頃から父が使っているのを見ていてね。」
川井はリビングに無線機を置くと、電源をつけてどこかに連絡を取ろうとしていた。
しばらく黙って周波数をいじっていたが、やがて目的のところに繋がってらしく、呼びかけを始めた。
「こちら川井巡査。南警察署応答せよ。繰り返す。こちら川井巡査。誰か応答せよ。」
どうやらこの街の警察署に繋げているようだ。しかし、何度呼びかけても向こうからの応答は無かった。
何度か諦めることなく呼びかけを行っていたが、やがてため息をつきながら無線機のマイクを置いた。
「先ほども試したんだが、ずっとこんな感じだよ。」
「・・・誰も出ないってことはまさか・・・。」
「・・・警察・・・壊滅してる・・・。」
最悪の展開を予想して、胡坐をかいて座っている松村と、ケイの傍で座っている夕日が顔を青くしながら呟いた。
しかし、一文字の隣に座っているケイはさらに悪い状況に思い立っていた。
「全員がゾンビになってるってこともありうるぜ。こりゃ警察署に向かうのを思い直した方がいいかもしれねえな。」
「マジかよ・・・。勘弁してくれよホントに・・・。」
一文字が思わず天を仰ぐ。自分達が向かっていたところにゾンビが

わんさかいるかもしれないのだ。良い気分ではないだろう。

「もういい加減にしてほしいんだけど・・・。」

ケイの隣にいる野辺が疲れた様子でため息をついた。流石に彼女も段々と参ってきているようだ。あまり顔色が良くない。

ふとケイが皆の表情を見ると、まともな顔色をしているのは入り口で立ったままの今田だけで、他は全員顔色が悪かった。

ケイは自分の顔がどうなっているかは分からないが、恐らく良くは無いだろうと思った。

「・・・ここで仮眠を取っていこう。皆精神的に限界が来てる。」

「そうだな・・・・・私もいささか疲れているようだ。」

黄泉が賛成したが、その声にも力が入っていない。

「ごめん・・・私もうだめだわ・・・・・。」

野辺はそれだけ言うと、ケイの肩にもたれて眠ってしまった。余程疲れていたのか寝つきがいいのか、すぐに規則正しい寝息が聞こえてきた。

「お～い、動けんのだが・・・。ちょっと～？」

ケイが野辺を揺すって起こそうとするが、野辺は全く起きる気配が無かった。

ケイが体を動かせずに困っていると、今度は夕日が胡坐をかいていたケイの膝を枕にしてしまった。

「ちょ、俺は寝具じゃないよ！？」

「ケイくんの傍・・・・安心する・・・・。」
それだけを告げると、夕日もすぐに眠ってしまった。
「・・・ハア・・・・。」
しばらくどうやって起こそうか考えていたが、2人のとても安らかな寝顔を見て、やがて諦めて体を壁に預けた。肩と膝からは温かい人の温もりが伝わってくる。
それを感じながら、ケイの瞼は徐々に重くなっていった。
「やっぱスケコマシだなお前。」
一文字はケイが完全に眠ったと思ってつい口を滑らしていたが、ケイの耳には微かに届いており、後で仕返しがされるのだが、それは後の話になる。
無論そんなことは知らない一文字は、何となく嫌な予感を感じながら瞼を閉じていった。
「私も・・・・・眠るか・・・・・。」
大分眠気に襲われている黄泉はそう言うと、ケイ達4人の近くまで行って寝転がった。
やがて、すぐに静かな寝息が聞こえてきた。
それぞれが寄り添うように集まっている5人を見て微笑ましそうに川井は笑った。
「フフ・・・大分仲が良いようだね・・・・。」
「会長は確か初対面だった筈だが・・・・・まあいいか。」
今田は呆れた様子で苦笑していた。その表情には最初の頃にあった

警戒心は全く無く、友人を見るような目つきだった。

「今田さんだって、大分角が取れてるじゃないですか。」

「う・・・、まあ、こんな状況でいさかいを起こしても意味が無いしな・・・。」

松村からの思わぬ攻撃に動揺したのか、今田の返事が弱々しくなった。

川井もニヤニヤ笑いながら、今田の様子を面白がって切り込んできた。

「ほほう？　そう言うわりには、私を助けるときには随分良い呼吸だったようだけどね？」

「そういえば、ケイさんと随分気が合うみたいですよ。何度も意見が合ってましたから。」

「ぐうう・・・わ、私は上で外を見ている！！」

今田は2人からの言葉攻めに耐え切れなくなり、2階へと逃げていった。今田で遊んだ2人は彼が2階に逃げた後もしばらく笑っていた。

ひとしきり笑い終えると、河合は少し意外そうな顔をして松村を見ていた。

「しかし、意外だね。君はもっと大人しい子かと思っていたんだが・・・。」

川井の疑問に、松村は苦笑を浮かべた。

「いやあ・・・・・ああいうのを見ると、ついついからかってしまうんです。」

「・・・結構Ｓだね君・・・・。」

川井は松村の意外にＳな性格に、ちょっと引いていた。
その後、リビングは５人も先に寝ているため、松村はリビングの廊下を挟んで向かいにある和室へ向かい、川井はしばらく呼びかけを続けるため無線機を持って２階の自室へ向かった。
そして、家の中はケイ達の寝息を除いて一切の音がしなくなった。
ようやく訪れた、静かな時間だった・・・。

僅かな休息。しかし、その先には望まぬ未来が待っていた。

第9話：微かな休息（後書き）

次回からは一人称で進めていきます。
急に変わって分かりにくいかも知れませんが、ご了承ください。

第１０話：望まぬ犠牲（前書き）

すいませんすいません、前回から１ヶ月も更新を開けてしまいました。
しかもあとがきに書いていた一人称に変えるということも止めました。重ね重ねごめんなさい。

第１０話：望まぬ犠牲

ＰＭ１１：５５。

外が完全に宵闇に染まり、生ける死者のうめき声以外何も聞こえない。時折悲鳴や稀に爆発音が響いてくるが、それもすぐに聞こえなくなる。そんな中、ケイ達が休んでいる川井の家に近づく影があった。

周囲の塀などが作る影に隠れているため詳しくは分からないが、僅かに分かるシルエットから、男だと思われる。

その男は他のゾンビと同じくよたよたと頼りない歩き方をしていた。

しかし、どこか違和感があった。

良く見ると、片腕が異常に長い。明らかに腕がコンクリートの地面についている。

そのゾンビは一度川井の家の前で立ち止まり、家を見つめる。

まるで、その中に自分にとって極上の獲物がいることを分かっているかのように。

やがてソレは見るのを止め、家の玄関へと近づいていった・・・・。

「うう・・・・。」

ケイ達が眠っている居間の、廊下を挟んだ反対側にある和室。そこで寝ていた松村は寝苦しさを感じて目を覚ました。

起きるまでに多少うなされていたが、この状況では仕方が無いだろう。

少し寝ぼけているのか、周りをキョロキョロと見渡す松村。居間の

方を見て、一文字の体と黄泉のものと思われる足を見た後立ち上がる。

（・・・トイレ。）

尿意をもよおしたのか、念のためにバットを持ってトイレへと向かう。
その時、ガラス戸の玄関に目を向けた松村は、一瞬玄関の前に不審な影が横切るのを確認した。
松村はおかしいと思った。生きている人間ならすぐに入ってくる筈だし、ゾンビだとしてもここまで近づいているならドアを叩くなど、何かしらのアクションを起こす。しかし、今の影は只玄関を通り過ぎただけだったのだ。
安全かどうかの確認をするため松村は玄関に近づく。一瞬居間で眠っているメンバーを起こすべきかと思うが、全員疲れているのだから自分1人で行こうと思い直し、そのまま玄関のガラス戸の前まで近づく。

「どちら様ですか～・・・？」

松村は小声で外に向けて話しかける。すると、松村の声が聞こえたのか玄関の前に人影が写った。
人影は微かに唸り声を上げながら、中に入ろうとしているのかガラス戸に体を何度もぶつけていた。ドアの開け方すら分からないようで、これで先ほどの不審な影はゾンビだということが分かった松村は寝ていた和室へ戻ろうとした。
このとき、松村は既に後ろを向いていたため気づくことが出来なかった。ガラス戸に体をぶつけていたゾンビが、右腕を振り上げたことに。そして、その腕が異様なまでの長さだったことに。
次の瞬間、派手な音とともにガラス戸が粉々にぶち壊された。

「！？」

突然の出来事に松村が驚きながら勢いよく後ろを向くと、そこには明らかに今まで見てきたゾンビとは違う奴が居た。
血の染み込んだジーンズに、まだ生きていた頃にゾンビやられたのか随分をボロボロのTシャツ。他のゾンビの餌にされたのか、顔や腕、足など所々食い千切られた跡があった。そこまでは今までのゾンビと同じだ。しかし、右腕だけは違っている。
長さが異常だった。太さはそれ程変わってはいないがどう見積もっても3メートルはありそうな長さに、先端から２０ｃｍぐらいのところまでに生えている鋭利に尖った棘。
松村は予想外の事態に思考が停止していた。今までのゾンビとは桁が違う相手とたった一人で相対している状況に、彼の心は恐怖で麻痺してしまっていたのだ。
玄関を破壊したゾンビを見ていた、いや目を離すことが出来なかった松村は、ゾンビの口の端が少しだけ持ち上がったように見えた。
あたかも、新鮮な獲物を前にして歓喜に打ち震えているかのように・・・・。
それを見て、松村の恐怖心は臨界点を突破した。
もはや恥も外聞も無く、自分が小さく悲鳴を上げていることにも気づかずに松村は後ろに振り向いて走り出そうとした。
彼にはまだ望みがあった。すぐ傍の部屋に仲間が眠っている。彼等に助けを求めよう。そう考えていた。
しかし・・・次に彼が目にしたものは、ライフルを構えて廊下へと出てくるケイと、どこからか飛び散ってきた紅い液体だった。
そして、彼の意識は深い闇の中に沈んでいった・・・。

ケイはガラスが割れるような大きな音を耳にして目を覚ました。

（・・・？　何だ？）

突然の物音に、寝起きながらも警戒心が出る。
肩と膝に重量を感じるが、そんなことはお構いなしにすぐに立ち上がる。ゴン、という音が聞こえたり微かに不機嫌そうな声が聞こえたが、ケイはスルーした。
まだ寝ている仲間を起こさないよう気をつけつつ、壁に立てておいたＭ４Ａ１を掴み廊下へと出ながら両手に構える。
そして、信じられない物を見た。

「・・・え・・・・。」

廊下へと出た瞬間、ケイは自分の見たものが信じられなかった。
廊下には松村がいた。そして、玄関のガラス戸が破壊されていて、そこにゾンビが現れている。
そのゾンビから長い右腕と思われるものが伸びており、その先端はこちらを向いたまま固まっている松村の後頭部に伸びていた。
そして松村の後頭部からは今日一日で随分見慣れたものが流れていて、少しづつ床へ垂れていた。
・・・松村は後頭部から大量の血を流していた。

「松・・・村・・・・・・？」

ケイは掠れた声で呼びかけた。松村は何も答えない。只頭から血を流し続けるだけだ。

「おい・・・何か言えよ・・・・言ってくれよ・・・・・・・なぁ・・・・。」

本当は気づいている。松村がどうなっているかを。しかし、頭が理解しても、心は理解しようとはしなかった。

「まっつん・・・なに固まってんだよ・・・・・。」

ゾンビの右腕の棘が、ゆっくりと松村の後頭部から抜かれた。
支えを失くした松村の体は後ろ向きに倒れていき、やがて仰向けになって床に転がった。
ドサ、と言う音を聞き、ケイは気が遠くなるような錯覚に見舞われた。
何で倒れてんだよ・・・・。とっとと起きろよ・・・・・。起きて玄関のゾンビに一発ぶちかましてやれよ・・・・。
そんな言葉が浮かんでは消えていき、されども一言も口に出して告げられることは無かった。
やがて、床に松村の血が広がっていく。後頭部からは微かに血とは違う色のモノが流れ出ており、それが何なのか、医学的知識に乏しいケイでも感づいた。
玄関のゾンビは松村へと近づくと体の上に圧し掛かり、容赦なく彼の体に食らいつき、松村の肉を食らってゆく。
それを見て、ケイの心のリミッター的なものが音を立てて切れた。

「あ・・・あ・・・アアアアアアアアアAAAAAAアアアアああ！！！！！！！」

叫び声を上げながら、ケイはＭ４Ａ１の銃口をゾンビへと向けて、力一杯引き金を絞る。

夜の闇に、少年の慟哭と連続で響く銃声が木霊していく・・・・・。

世界は残酷な生き物。世界の残酷さを受け入れ諦めるか、泣きじゃくって目を逸らすか、立ち上がって超えていくかはその人次第。

第１１話：強きモノ（前書き）

前回の更新から～～～・・・。２ヶ月経過！！
ちょっと切腹してきます。誰か、介錯を！

第１１話：強きモノ

ＡＭ・０：００。

２階の客間にて仮眠を取っていた今田は、突然の銃声によって飛び起きる羽目になっていた。

「うおお！？　な、何事だ！？」

銃声は階下から断続的に聞こえてくることに、今田は違和感を覚える。

（この銃声・・・・・・崎沼か？　だが、それにしては随分と弾が多く使われているな・・・・。）

ここまでの道中において、ケイが無駄弾を使うことはほとんど無かった。的確にゾンビの頭部へと撃ちこみ、一発で仕留めていたのだ。

だが、今聞こえてくる銃声にはかなりの弾丸が使われている。

（まさか・・・・奴らが集まって・・・・！！？）

今田はすぐに壁に立てかけられていたバットを掴むと、急いで階段へと向かい下の階に下りていった。

一階に下りると、既に銃声は止んでいて、今田の鼻に血臭と硝煙の入り混じっている匂いが入り込んでくる。

今田が視線を動かすと、リビングで眠っていた筈のメンバーが全員起きていて、皆一様に玄関へ信じられない物を見たかのように目を見開いていた。

今田もそちらへ目を向けると、何故皆が固まっていたかを知る。

「崎沼・・・・・・。」

玄関ではケイが一心不乱に撃ちすぎて弾切れになったＭ４のストックを、恐らくはもう絶命しているであろう片腕が異様に長いゾンビへ叩きつけている。何度も、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も。
ストックにヒビが入り、自分の顔に血しぶきが飛び散っているにもかかわらず、ケイはひたすらゾンビを殴り続ける。　既にゾンビの頭蓋骨は完全に砕かれ、床に血と頭蓋の破片が脳漿と思われるものと一緒に流れている。
だが、それでもケイは決して殴りつけるのを止めようとはしない。
無感動に、無表情で、無言のまま、何も感じていないかのように殴り続けている。
・・・・頬へと流れ、床へと落ちていく、透明な雫だけが彼の心境を表していた。
誰も、ケイを止めようとはしない。いや、止めることができないでいる。
無表情のまま、ただ静かに涙を流してゾンビを殴り続けているケイを見て、彼がどれだけ辛いのかをいやでも理解してしまったからだ。ここにいるメンバーの中で、何が起こったのかを正確に理解している者はケイ以外にはいない。あまりにも事が急に起こってしまったからだ。
だからこそ、ケイを止められない。彼がどういう苦しみを抱え込んでしまったのか、想像はできる。だが、それだけだ。彼にどう声をかければいいのか、何をしてあげればいいのか、確実にケイを救える手立てが思いつかないのだ。

「ハァ・・・・・・ハァ・・・・・・・・。」

いつまでそうしていたのだろうか。気が付くと、段々と血や脳漿によって湿り気を帯びていた殴打の音が聞こえなくなっていて、ただケイの荒い息遣いのみが聞こえているだけだった。
始めに動いたのは、ケイと一番長い付き合いである一文字だった。

「・・・ほらよ。」

一文字はケイの傍に近寄ると、手に持っていたタオルを頭に掛けてやる。返り血で主に顔を真紅に染めてしまっているケイは、Ｍ４から手を離し非常にゆったりとした動きで頭に乗せられたタオルに手を伸ばす。
どこか思考が麻痺しているかのような緩慢な動きでタオルを使っているケイを見て、今まで固まっていた他の面子もケイの傍へと近寄っていく。

「ちょっと大丈夫！？」
「お、おい無事か！？」

野辺と黄泉が心配そうに声を掛けるが、ケイは軽く手を上げるだけでそれ以上の反応は示さず、ただゆっくりと顔を拭くのを再開する。少しだけ遅れて、険しい顔つきの夕日がケイの傍に近寄り彼の手を取る。

「返り血が凄い。お風呂に入って。」

そう言うと、ケイをこの家の風呂場へと連れて行く。ケイも特に抵抗は見せずに夕日に引っ張られていった。
ケイの姿が見えなくなると、その場に残っていたメンバーは顔を見合わせ、一斉にため息をついた。

「崎沼のやつ、かなりきつそうだな・・・・。」
「あんなに沈んでるの始めて見たわよ。正直に言って、見てられなかった。」
「・・・私は、彼に何も言えなかったのが非常に悔しい。」
「だからと言って、あそこで安易な励ましを与えては逆効果だった。・・・一文字？　どうした？」

一文字は話には加わらずに1人床で息絶えている松村の傍でしゃがんでいる。時折松村の死体と、恐らくは外れた流れ弾によって砕かれたと思われる玄関の扉の残骸の上に転がっているゾンビの死体を見比べているようで、何かを調べているらしい。

「・・・そういえば、松村くんの弔いをしてあげないとね。」
「・・・そうだな。このままでは化けて出てくるかもしれないしな。」
「あはは、まさかぁ。」

松村の死体を見て、先ほどからずっと放って置かれていた彼のことを思い出す。未だに雰囲気が重いままの野辺を見て、珍しく黄泉が冗談を言って野辺の暗い雰囲気を少しだけ紛らわし、2人はリビングへと何か無いか探しに向かう。
今田はそんな2人をリビングに行くまで見ていたが、自分がすることを見つけられないのか、一文字へ話しかける。

「・・・これは、あくまで予想なんだがな・・・・。」
「・・・なんだ？」
「ケイは・・・・・松村を目の前で殺されたのでは、と思ってな。」
「・・・・。」

今田が静かに話しかけていても、一文字は松村の傍でしゃがみこん

だまま顔を上げない。今田に自分の顔を見られないようにしている。
「だとしたら、アイツはかなり傷ついていることになる。もしかしたら立ち直れないほどに」
「それがどうしたよ。」
一文字は急に喋り出し、今田の独白を遮ってそれ以上話すことを止めさせてしまう。見ると、一文字は顔を上げていて、その表情には固い意志が見て取れる。
「俺はお前よりアイツを知ってるんだぜ？　それくらい分かるさ。」
「・・・・。」
「だからこそ、俺はケイが立ち上がることも確信してる。アイツは強い。昔荒れてた俺を立ち直らせてくれた時に、俺はそれを知ったからな。」
「一文字・・・・・。」
今田は目に驚きを浮かべ、心中には感嘆にも似た感情が沸き起こっていた。
自分が今まで単なる問題児だとしか思っていなかった人物は、誰よりも友人を想い、誰よりも信じることのできる素晴らしい人物なのだと。
今田も、ほんの少しだけ笑みを浮かべると、一文字の言葉に同意する。
「そうだな・・・・。彼は、崎沼は我々よりも遥かに強い。きっと大丈夫だろうな。」
「ま、当然でしょ。」
今田が自分の言葉に頷いていると、リビングからカーテンとして使

われていたと思われる布を持ってきた野辺が当然とばかりに胸を反らしている。

「いや、お前のことじゃねんだぞ？　なんでそこで自分のことのように偉そうにしてんだよ。」

「私はケイの恋人なのよ？　自分の彼氏を自慢に思うのは当然でしょ。」

「・・・お前が勝手に言ってるだけだろ！」

「大丈夫よ。世の中には『事後承諾』って言葉があるんだから。」

「それ全然大丈夫じゃねえだろ！！」

・・・何だか、いつもの言い争いになっている。罵詈雑言がかなり一方的に放たれているいつもと比べればまだおとなしめな方だが。野辺の後ろから、彼女の代わりにカーテンを持ってきた黄泉が苦笑している。

「全く・・・。余り騒いでは外のゾンビが集まってきかねんぞ。」

「まぁ見逃してやれ。　このくらいの元気のある方が精神衛生上良いだろう？」

黄泉はカーテンを松村の死体に掛けてやると、床にしゃがみこんでから目を閉じて静かに手を合わせる。それを見た今田も同じように手を合わせ、松村の冥福を祈る。野辺と一文字は言い争いに夢中で気づかなかったりするが。

しばらくして、目を開いた黄泉は微笑を浮かべながら口を開いた。

「私も・・・彼を信じているさ。ただ、無闇にそう告げてもケイの重しになってしまうからな。」

確かに・・・。勝手に期待をしてしまって、それがケイの心労にな

ってしまったら、徒党を組んでいる意味が無い。助け合うためにチームになっているというのに。

「だから私は、彼を支えること、それだけに集中する。彼には死んで欲しくないからな。」

そう言うと、黄泉は立ち上がってケイの入浴している風呂場へと進んでいく。それを見て、一文字とまだ言い争っていた野辺は、一文字の腹に蹴りを叩き込んで黙らせてから黄泉の前へ立ち塞がる。

「ちょっと、どこに向かってんのよ。」
「ケイの様子を確かめにいくだけだが。」
「じゃ、私がついていってもいいわよね？」
「野辺はそこで移動の準備をしていてくれ。私1人で充分だ。」
「アラ、なら私が代わりに行くから、生徒会長が準備をしててよ。」
「・・・・邪魔するのか？」
「邪魔じゃないわよ。ただちょっとだけうざったいのよ。」

段々と険悪な雰囲気になっていく。今田はこの場から立ち去りたくてたまらないのだが、あいにくと階段は2人の向こう側にあり、背後は外へ繋がる玄関しかない。ここからの逃走は不可能だったりする。

（崎沼め・・・・。俺にとばっちりを持ってくるなよ・・・・・。）

この場にいない原因を作ったヤツに心の中で悪態を吐きつつ、仕方なしに目の前の修羅場を見ていると、あることを思い出し、迂闊にもそれを口に出してしまう。

「ん？　そういえば、夕日さんはケイについて行ったまま戻ってい

ないな。」

ピタリ、と野辺と黄泉の動きが止まる。それを見て何となく自分がまずいことを言ってしまったのではとびびっている生徒会副会長。その内に、２人から物凄く周囲に響き渡る含み笑いが聞こえてくる。

「フ、フフフフフフフフフフフフ。」

「夕日さんたら、中々やってくれるじゃない・・・・。」

（こ、怖ぁぁ・・・・・・・！！！！）

後に、この２人の笑みは今まで怖い物は無いと自負していた生徒会副会長・・・今田戒が、生涯で一番恐怖した瞬間だったとコメントする。

第１１話：強きモノ（後書き）

更新遅くなってすんません。もう土下座です。
ただ、本当に終わりまで持ってくんで、それは安心してください。
・・・年内に終われる自信すらないけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6958e/

ＤＥＡＤ・ＥＮＤ・ＲＵＮＮＩＮＧ（休載中）

2010年10月17日22時02分発行